毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年三月廿五日發兌

第七拾四號

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり瘦せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虛弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を瘦せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を强くして活力を與ふる滋養分が嬰兒、小兒及虛弱なる母親を益すること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居徳兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

金儲けの新法

入造麝香、毛生藥、香水、香油、精錡水、歯磨、化粧石鹸、洗濯石鹸、のみとり粉、フランチル、複寫インキ等ノ製造法幷鍍金術、器械入ラズ**寫眞早取法**全名刺早印刷法、流行的輕便電氣燈、**清酒倍增法**醬油製造法、腐敗酒チ即座ニ直ス法、醬油倍增法、おしろい製造法、其他**種々**以上ノ術チ知悉シ營業セバ一ノ商法トナリ大利チ收ムルヿ確證ス右製造法殘ラズニテ五十錢ノ處今回限リ二十錢ニ割引ス望ミノ諸氏ハ至急注文アレ直ニ明細書チ送ル此書チ見レバ如何ナル人ニテモ容易ニ實行シ得ル也爲替ハ桑名郵便局宛郵劵代用ハ必ズ四錢增(無効責任)

三重縣桑名矢田磧　弘報館

塚越芳太郎著

近松著作一斑　上卷

定價三十五錢　郵税八錢

上卷目錄◎第一、近松の著作◎(一)彼が著作の類別○史戲曲○社會戲曲さ社會戲曲◎(二)彼が戲曲の躰○如何に唱歌すべく適當なる躰を有する乎○如何に演劇すべく適當なる躰を有する乎◎(三)彼が戲曲の躰の進歩◎(四)彼が戲曲の想○戲曲の主意○人物の性情◎(五)彼が戲曲の想の開展◎彼が戲曲の効果○彼が戲曲より學び得べき教訓○彼が戲曲より學び得べき歴史○彼が戲曲より學び得べき文學◎第二彼の史戲曲◎「曾我會稽山」解剖◎「雪女五枚羽子板」解剖◎「國姓爺合戰解剖」◎「關八州繋馬」解剖

既往の日本は如何に彼の著作を秘藏することを誇るを得るや。彼の著作は其眞成の價値を以て如何に貴重せらるゝに足るや。此書は即ち詳に此の疑問に答へたる者。下卷近刊。

發兌元　東京市京橋區日吉町　民友社

平田久著

露西亜帝國

定價卅五錢　郵税六錢

攻究すべき時期に著されたる本書は、今や更らに最も攻究すべき必要を以て讀まるべくなれり。今日の形勢を看よ、露西亜を知らざる可らざるは我國民上下一般の特勢なりと知らずや。

第一國民小説	定價十五錢	郵税四錢
第二國民小説	定價十五錢	郵税六錢
第三國民小説	定價十五錢	郵税四錢
第四國民小説	定價十五錢	郵税四錢
第五國民小説	定價二十錢	郵税四錢
第六國民小説	定價十五錢	郵税四錢
第七國民小説	定價十五錢	郵税四錢

第七國民小説　印刷中下旬發賣

發兌元　東京々橋區日吉町四番地　民友社

水上梅彦編纂

日臺會話大全

定價三十錢 郵稅四錢

◎東京朝日評　日本と臺灣の會話大全といふことなるべきも臺灣は已に日本版圖内に在り今日にては何となく妙に聞ゆ併し書中の會話は隨分汎く蒐めありて(其誤謬のあるや否やは知らず)其序文の冒頭に本著の期する所は厦門俗語を學修せんと志す初學者の階梯たらんとするに在ると見ゆ以て本書の價値と便益の在る所を知るに足るべし

◎中央評　印刷体裁極めて雅麗中身の價値蓋し之に稱へるならん吾人多く臺語に通せず細評に及ばず

◎都評　臺灣には我國語を用ゐしむべきものなれば強て臺灣を習ふの要なきが如しと雖も臺灣人を教化せしむるには先づ彼の國語をも知らざるべからず此書以て其指針と爲すべし

◎自由評　体裁甚だよく時節柄必要の書定價は僅か三十錢

◎朝野評　今や我國民は臺灣を知らざるべからざるの一大義務を有す何となれば、臺灣は實に我領土なればなり、我領土は即ち我國、我國は即ち我家、我家は即ち我身、之をして等閑に附するを得ば天下何物か克く憐重の觀念を要するものあらんや、日臺會話大全著述の意蓋し此に外ならざるべし、若し夫れ著作の体裁、言語の當否は、由來臺灣語を知らざるの予輩は謹んで緘默の徳を守らん耳、

◎東北日報評　日用對話、諸般の會話、商品條目及商業用語、日臺いろは辭典の四章より成り總べて三百四十八頁序文にも見ゆる如く厦門俗語を修得せんとするには實に必須の書なり

再版

比律賓群島

定價拾八錢　郵稅四錢

精細なる地圖及土風畫十葉挿入

「經濟雜誌」の評　比律賓群島は我が新版圖たる臺灣とは、咫尺相接す、地理上貿易上は勿論、將來政治上にも關係する所尠からざらんとす、此書同島の事情を說く詳なり、經世家は一讀すべし、

「太陽」　世界の問題は漸く東漸し又南漸せんとす、比律賓群島の如き漸く世人の注意を惹く、此際に方り本島の風土民俗商工等の事を編述したる本書出づ、一讀の價値はたしかにあり、

「早稻田文學」　好体裁二百餘頁の册子、南洋ヒリッピン島の概誌、概史を叙して、讀過の際に一種の趣味あらしむる書き振り也、文章は穩と評すべし、「本書を公にするもの豈微旨なからんや」とは蘇峰生の序中の語なり、圖南に志あるの士宜しく一讀すべし、卷首に風俗圖を添へたり、「比律賓群島概誌」「比律賓發見史」「外寇内亂史」「大日本帝國と比律賓島との交涉史」「政府及地方行政」「比律賓島陸算表」「僧侶の勢力」「麻尼剌市」「開化せる土民の性質」「諸民族畧記」「支那人」「回々教人民及南部諸島民」「商工業」「農產及鑛產」、之れを本書の目次とす

「讀賣」　比律賓群島は我新領たる臺灣と僅に一葦水を隔つるのみ呼べは將に應へんとす其貿易上政治上に關係する所大なるや知るべきなり本書が該群島の形勢を江湖に紹介するもの豈に夫れ偶然ならんや經國の士須らく一讀して可なり

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

松原岩五郎著

青年叢書號外

征塵餘錄

定價金十五錢　郵税金二錢

◎「每日」評　蘇峰卷首に題して若し從軍記者に行賞を爲さば我が松原岩五郎君の如きは金鷄勳章受享者の一人たらむといふ、然れどもわれ等は當時從軍日記の壯觀なるよりも、むしろ朝鮮內地探險記を愛讀したるの一人なり、必ずしも文の妙にあらず、事の面白きを以てなり、事の必ずしも面白きにあらず、其目的と其苦心と其着眼とを愛したるなり、倉皇たる旅路に於て視るところ聽くところを描きたるもの、固より精到なるを期すべからざるも、最暗黑の東京を觀察する眼を以て朝鮮內地の樣を描かむとしたる初一念最も多とすべく、而も其目的の幾分を成就して鷄林の社會人情の一面を活寫したるは最も趣味深し、筆を載せて軍に從ふ文士多かりしもこの特異の目的を以てしたるは氏一人なるべく、年少相携へて梅樹に枕し春風に吹かれつゝ繙讀せむには最も恰當の書なるべし、

◎「中央」評　嘗て慨然身を貧天地饑寒窟に投ずる數閱月確實精細なる「最暗黑の東京」を江湖に紹介して大喝采を博したる乾坤一布衣生松原岩五郎氏征清役の從軍記者として鷄林遼東の野に轉戰するもの殆んど一歲國民紙上常に精確敏速の報道を寄するの傍ら日常詳細の實況を鈔錄して征塵餘錄を成す發程より戰鬪線馳廻りの記に至る迄二十九件之を繙くに身軍陣中に在つて砲煙彈雨の間を馳驅するの感あり青年叢書の號外として民友社より發刊す德富蘇峰序して曰く從軍記者に金鷄勳章を與ふるの擧あらば我松原君の如き受享者の一人ならんと既に此著此序文あり何ぞ金鷄勳章を云々するに足らんや

◎「東京日々」評　筆を征途の發靱に起し進んで韓山妖雲の間を過ぎ轉じて遼東大原迅雷疾風の境に入る或は險路の艱難を凌ぎ或は風雪の酸苦を嘗め忽にして硝烟天に漲ぎり忽にして彈雨地を穿つ攻伐進襲經營慘憺の狀歷々覩るが如し殊に海城の進軍、缸瓦寨の役、牛莊の市街戰、田庄臺の陷落等悉く著者が戰線奔馳の間に收錄せしもの語々實に迫り句々意表に出づ簡潔短明展讀措く能はざるの妙味あり

◎「早稻田」評　青年叢書の附錄として出でしもの、書名を聞きてまづ如何なる書なるかを知るべく、著者の名を聞きて其の觀察の方面を想ふべし、即ち從軍紀行といふとも、其の觀る所、筆を作る所、多く土地風俗の方に傾き、自ら探撿者の面目を見る、隨うて、記する所も後編よりは前編朝鮮內地旅行記のかたに趣味多きが如し、されど著者の筆力と膽力とは却りて後編從軍記のかたに見えたり、缸瓦寨の激戰を敍するあたり以下筆に力あり、田庄臺の戰記に至りて最も調子高し、間々修辭上の累あり、また蛇尾に終れる節なきにあらねど、草々の際一氣呵成の文として見るときは、以て一部『征塵餘錄』の價値を害ふに足らざるべし、

發兌元　民友社

東京々橋區日吉町四番地

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		
一冊	金五錢	
半年(十二冊)	前金五十錢	
一年(廿四冊)	同金一圓	
地方郵税共	金五錢五厘	金五十六錢	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

國民之友 極東 英文之部

定價壹冊拾貳錢　毎月壹回　二十日發兌

第貳冊

CONTENTS.
OF No. 2.

FRONTISPIECE :—
Kawan-on, a goddess of Mercy.
LEADING ARTICLES :—
The tendency in the recent history of Japan.
The evolution of Japanese Politics.
CONTRIBUTIONS :—
The present condition of cotton spinning industry in Japan····Kaneko Kentaro.
The war indemnity and the money market,
Prof. Garrett Droppers.
Indo-Germanic elements in the Japanese language,
Fujita Sutematsu.
MISCELLANEOUS :—
Sakurai-no-Eki······Y. Tan.
The recent war and Christian activity,
Takasugi Yejiro.
Nagasaki, a rift in the cloud,
Sachi.
Kwan-on.
CORRESPONDENCE :—
Schriftleitung des Far East.
Dr. Albrecht Wirth.
Our journals in foreign languages··················S. H.
NEWS AND NOTES.

口繪
觀音
社說
日本古代史の潮流
日本政治の進化
特別寄書
本邦綿糸紡績業の現況(金子堅太郎)
償金と金融市場(ドロッパース)
日本語に於ける印度日耳曼語の要素(藤田捨松)

雜錄
「櫻井之驛」(戲曲譯)(丹　幸馬)
日淸戰爭と基督敎(高杉榮次郎)
投書
「極東」の發行(獨逸文)(ヴイルツ)
日本の外字雜誌(エス、エッチ、)

時事
朝鮮事變
議會の停會
不信任決議案
進步黨
露帝即位式と東洋の政治家
露淸條約
軍事公債の新募集
増税案
日本郵船會社の歐洲航路
米の產出
樺山大將の歸京
李春生
「明國始末」の飜譯

壹冊拾貳錢一年前金壹圓貳拾錢郵稅內地壹冊壹錢

三月二十日發兌

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

別付の五

明治廿九年三月廿五日發行

家庭雜誌第七拾四號

目錄



（明治廿九年三月廿五日發兌）

社説

善を好むの習を作れ

人間は慣習の塊なれば習久しき時は自然に性となりて其爲す所自ら道に合する者なり。扨斯の如く習癖となりたる上は、一擧一動すべて此習癖より割り出さるゝものにて、いかほど思慮深きものにても、知らず識らざるの際に此習癖に制せられて、覺へず故態を發し。其事物の當否を判斷する意見も要するに己れの性癖に從つて是非するを常とす。諺に所謂蟹は己が甲に似せて穴を作ると云ふもの眞に人間性理の妙を穿ちたるものにして、小人は利に喩り、君子は義に喩る。品性は智識と判斷の源なり。

此道理にして明かならば子弟敎訓の道に於て自から發明する所あるべし。世には其子弟に道德上の理論を敎へて、而る後に之を其行事に現はすべきやうにせしめんとする者なきに非ず。即ち世に云ふ倫理學の類にして、先づ天理人道の根本より說き始め、諸事萬端此根本より推し論ぜしめんとすること是なり。こは勿論惡しきことにはあらざるべけれども、人は其知る所より直ちに其行事を類推し得べきものに非ず。知る所は却つて之を行はざるが習ひなるのみならず、堅忍不拔善く己を制して之を行ふものありとも、其擧動固より中心の自然に出でねば自からに矯飾の躰ありて其心は依然冷淡にして。所謂父母に孝なれども其心は猶安んぜざるが如きことあるを免れず。されば世の父兄若し子弟道德の高からんことを欲せば須らく其道德が自然の習癖となるやうに敎育せざるべからず。其幼き心を銘々の中に感化して、強いて意を用ふることもなく、勉強する

ことなく天然に人を愛し、善を好むの慣習を養成せざるべからず。此習慣一たび成れば、是れ品性の建築全く成りしものにして初頭より倫理書を以て其心を桎梏するにまさること萬々なるべし。

徒らに倫理書を讀しのみにて好善の素習なきものは、漫りに其學ぶ所を以て人を譏し人柄の悪しくなる傾きあるものなり。

然らば如何にして善を好むの習癖を作らんか、父兄自から其行爲を謹しみて子弟の模範たることと是なり。殊に家風として時を定め期を定め貧民救恤の事を行ふが如きは子弟の慈善心を皷舞すべきものなり。

聞く駿州靜岡にては享保六年の大饑饉に町奉行所より金を借り、後に至りて土地の大家百餘人にて之を辨金したるとなるが、此中にて今日まで迹方の殘りたるは三十家に過ぎず。其依然として富を保つものは十餘家に過ぎず。僅かに百年の間にして富貴の賴むべからざる斯の如し。而して其富を殘せし家を見るに多くは家風よろしく、道德上殊勝のこともありとぞ。積善の家に餘慶ありと云ふもの空言に非ず。家の興隆を希ふもの思はざるべからず。

（前號には家内繁昌の妙藥を掲げたり此度も古書より立身富貴丸といふを拔書して）

立身富貴丸　　塵斗奥附

一正直　五兩　一堪忍　四兩　一思案　三兩
一養生　三兩　一用捨　一兩　〆十六兩

禁物。無理、慮外、奢、油斷、虚言をいむ

右の通り配劑の藥每日可用之身を立て家をおこし子孫繁昌すること妙なり

科學

羊齒の話

ぜんまい、わらび、しのぶ、うらじろの類を羊齒と云ふ多くは山野陰濕の地に生ずれども又乾きたる岩石、古き樹の上、灣岸、石垣の上等にも生じ小なるは二三

分より長きは數尺に及ぶ植物なり今でこそかく小なる草に過ぎざれど昔〳〵大昔人が未だ此地球上に生れ出でざりし前即ち今より十數萬年の其昔羊齒類全盛の時代ありて皆低きも一丈高きは十數尺の大木をなし今日松杉等が山林に繁り居る如く其時代の山野森林には羊齒の大樹が欝蒼として生長し居たりしと云ふ松杉の如き大なるぜんまいわらびがありしとは一寸信じ難き樣なるも今日殘り居る化石等を以て多くの學者が一々證據を擧げて云ふ事なれば決して虛言にあらず

然るに此森林も大樹も土地の變動により多くは地中に埋められ上より強き壓力を受け終に今日の石炭と化したり今日堀り出す石炭の十分の九は此時出來たるものなれば此時代を又石炭紀と云ふかくの如く羊齒類全盛の時代も何時しか過ぎ去り其種族は退化し其形は小さくなり終に今日の羊齒と迄零落たり

然し今日にても熱帶地方には倘祖先のありし昔の血影を存する羊齒ある其幹は棕櫚の如く細長く其高は二三丈に及ぶ我邦にても南方熱帶の部に此を產す昨年京都に開かれたる博覽會に琉球小笠原嶋より出品せられたる長さ三四間太さ一尺餘の黒褐色の小判形の紋ある木材は正しく此羊齒類の幹なりき

植物界に於る位置

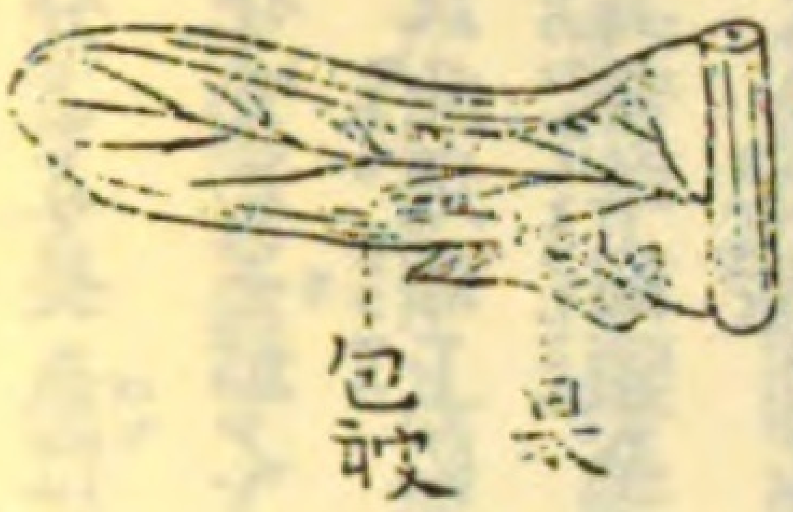
植物學者は植物界を大別して顯花植物隱花植物の二ッとなす顯花植物とは其名の示す如く花のある植物にて花咲き果を結ぶものは凡て此部類に入る次に隱花植物とは花を開かずして果を結ぶ部類の植物にて顯花植物よりは一段下等に位するものなりとす而して羊齒類は隱花植物の部類に屬す

隱花植物にも其種類甚だ多し小なるは顯微鏡の力を借らざれば見へざる「バクテリヤ」の如きより大は蘚苔羊齒の類に至り瓦石に附着し居る綠色のサビ溝に青く

なり居るドロ濕地に生ずる菌蕈の類餅の上に生ずる黴海中に生ずる昆布、海布の類皆此れ隱花植物なり而して羊齒類は其中にありて最高等の位置を占む

其生殖法

試に一株の羊齒を取り來て其葉の裏面を見よ鳶色の虫の卵の如き小なる塊が一面に列をなして附着し居るを見ん此は虫が産み付けし卵ならんと思ふ人あらんも其は誤にて此卵の如きものこそ花咲かずして結びし果なり此果は其形、大サ、着工合等羊齒の種類によりて差あり或は圓き塊をなすあり或は新月形に生ずるあり或は葉の中央に或は其緣に附着す又た或ものは其上に包被と名くる一枚の薄き膜を以て掩はれたるあり又他のものは一種特別なる莖枝を出して其にのみ實を生ずるあり



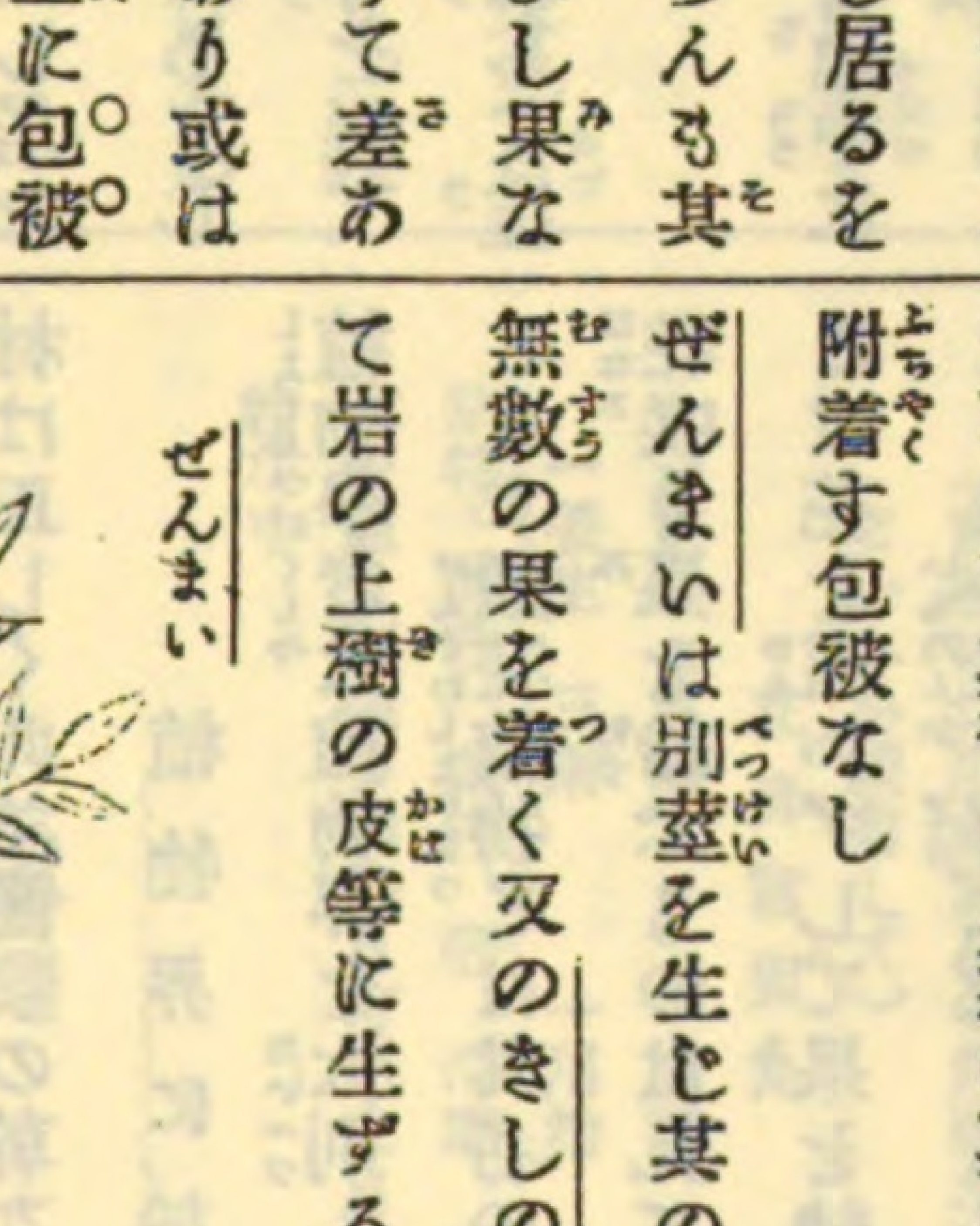
わらびの一葉片

わらびの果は葉の裏の緣に長く附着し其上に同形の包被を有す



しのぶの葉片

しのぶは卵形の小塊をなして切れ込みたる葉の緣に附着し包被あり



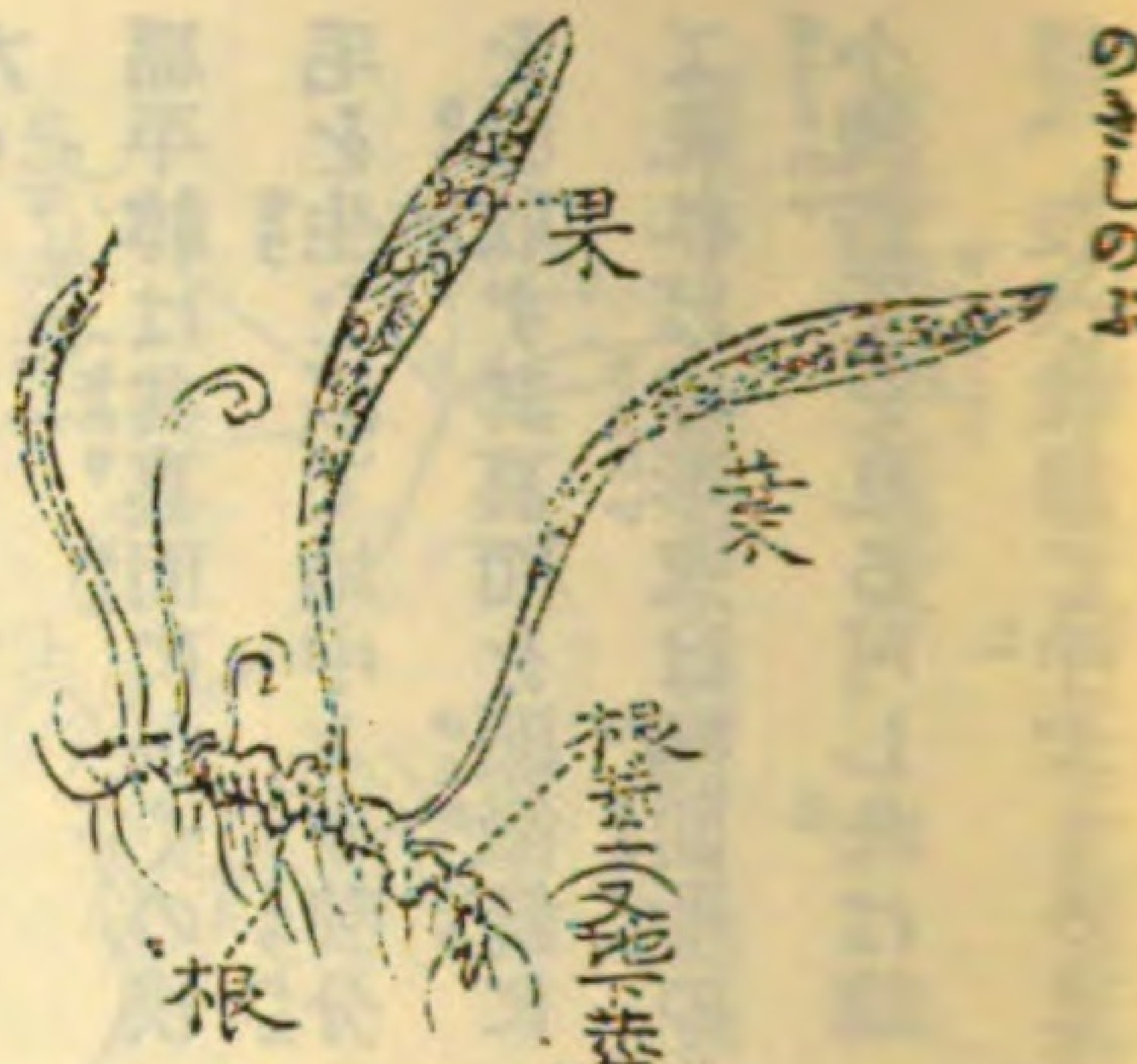
うらじろ葉片

うらじろは青黃色の小塊をなして其青白き葉の裏に多く附着す包被なし

ぜんまいは別莖を生じ其のみに無數の果を着く又のきしのぶとて岩の上樹の皮等に生ずる風蘭に似たる羊齒なり其葉の裏に七八個乃至十數個の圓き黃色の塊二列に附生するものは其果にして包被なし



ぜんまい



のきしのぶ

其果の着工合より叉八ツ目蘭とも云ふ

叉やぶそてつと云ふ羊齒あり餘程普通の種類なるが其鎌形の葉の裏一面に圓形の果の塊附着す包被ありて此れを掩ふ



やぶそてつ

叉しけしだとて溝側等に多く生ずる羊齒あり

其果は新月形をなして葉の裏に着き新月形の包被あり

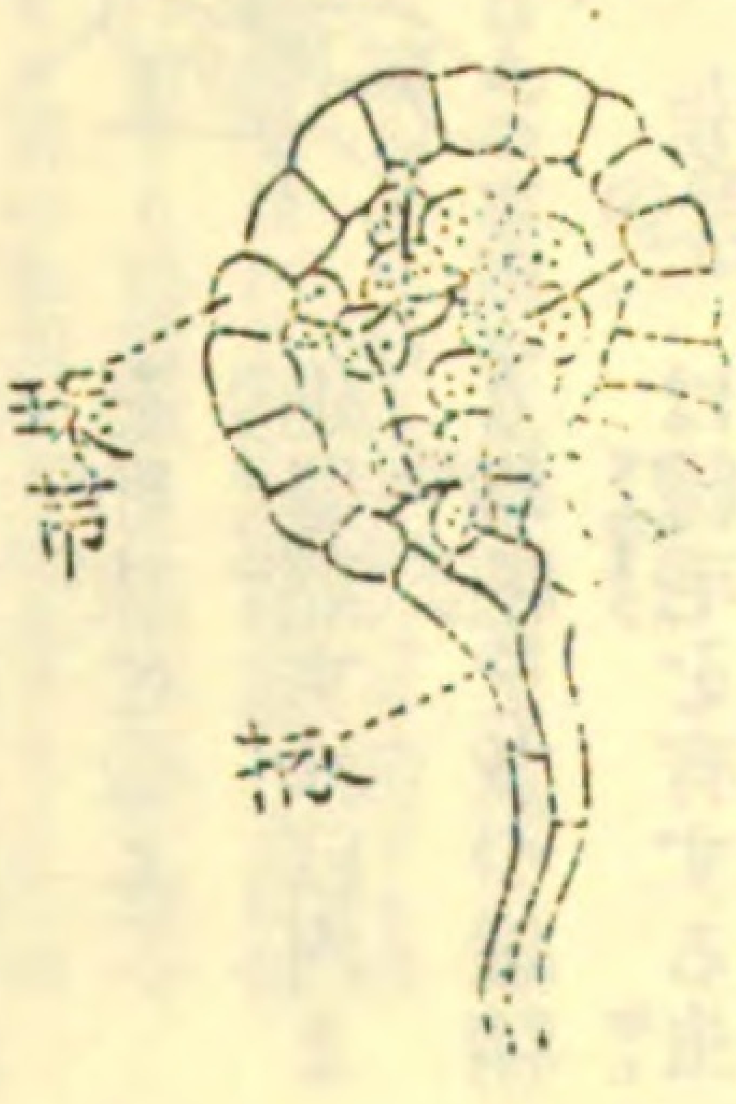
其他果の附く有樣種々ありて植物學者は多く此果の附着する有樣より羊齒を分類するなり

次に此果の塊を取て虫鏡にて此を窺へば一塊の果は更に多くの小塊粒よりなるを見ん此小粒を子嚢と云ひ注意すれば肉眼にても見る事を得此迄果の塊と云ひ來りしものは子嚢の多く集りたるものなれば此を子嚢群と云ふ



しけしだ

一個の子嚢を取り此を顯微鏡下にて見る時は圖に示す如し



子嚢郭大圖

扁平なる印圓形の嚢にして褐色の環を以て縱にハチ卷きをなす此を環帶と云ふ柄を以て葉に附着す中に數多く小胚を藏す此は胞子と云ふものにして顯花植物の種子に當るものなり顯花植物は花を開き其中に雄蕊、雌蕊なるものを生じ兩者の作用により初めて果を結び種子を生ずるものなるが羊齒は此と異なる花を生せずして果を結ぶ即ち羊齒の果なる子嚢は其葉の上に瘤の生ずるが如く芽の出るが如く

自然に生ぜしものにて別に雄蕋雌蕋なくして生ぜしものなれば其胞子を無性胞子と云ふ

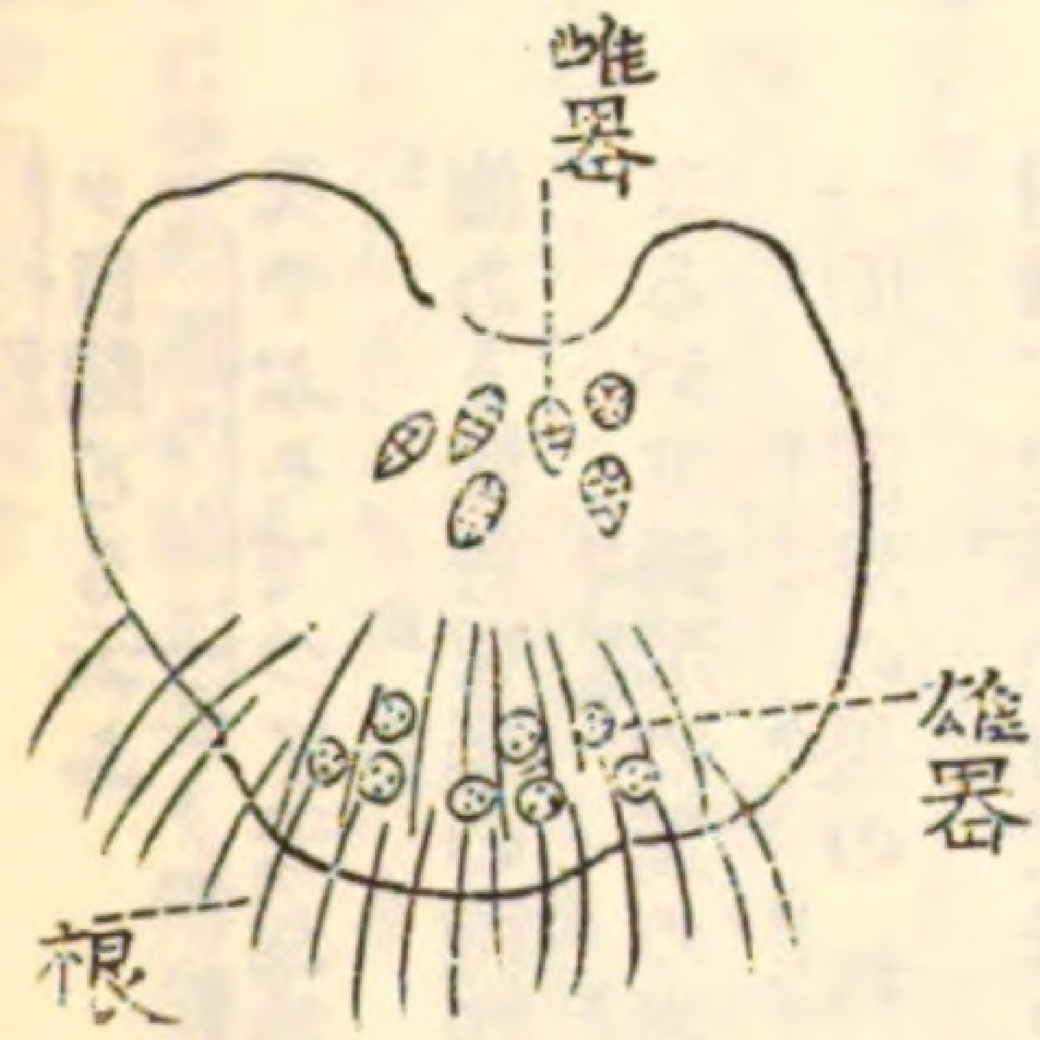
子嚢熟すれば環帶はぢけ膜破れて內藏せる胞子を飛散

胞子より扁平躰を生ずる圖(郭大)



す胞子は濕地に落ち發芽するも直に新羊齒とならずして先づ微細にして綠色の扁平躰なるものを生ず此ものは扁平にして其形、大さ、魚鱗に似たり

扁平躰郭大圖(裏面)



扁平躰は其裏面に多くの根毛を生じ以て地中より養分を吸收す其裏面を顯微鏡にて見れば球形又は橢圓形の小塊若干を見る可し此は雄器、及び雌器と呼ぶものにして顯花植物の雄蕋及び雌蕋に相當するものなり

雄器及び雌器を一層高度の顯微鏡にて見れば圖の如く雄器中には數多の雄精と呼ぶ小躰を藏し雌器は中に一

雌、雄器數百倍郭大圖



個の球躰を藏す此を卵球と云ふ

雄器熟すれば內より雄精を放つ雄精は纖毛を有する虫に似たるものにして其纖毛を動かして運動し雌器に至り其口より入りて內部の卵球に合すかくして卵球は雄精の精を受けて卵子となる此卵子こそ雌雄兩性の作用によりて生ぜしものなれば顯花植物の種子に相當するものなり故に此を有性胞子と云ふ

卵子は扁平躰中にありて發芽し生長して始めて新羊齒となる扁平躰は後に至りて消失す

かくの如く羊歯には無性有性の兩代ありて初めて完全なる生殖をなす



扁平体より新羊歯の發芽する圖(郭大)

羊歯には冬に至りて枯るゝものと枯れざるものとの二種あり冬枯るゝものは翌年の春に至りて新芽を出す冬枯れざる者も一二年の中には其葉古くなりて終に枯る故に毎年新芽を出す事前者と異ならず羊歯の新芽は其先曲りて下を向き居るを常とすぜんまい、わらびの食用に供するは此新芽なし



其　實　用

ぜんまい、わらびの新芽は食用に供せられうらじろは正月の飾として用ひらるしのぶは棕櫚球として賞せられ其他の羊歯も鉢植とせば美はしく洋人殊に此を賞美す又或羊歯の根莖(地下莖とも云ひ地中にある莖)は藥用に供し熱帶の大羊歯は木材として用ふ床柱等には最も妙なる可し羊歯の實用大抵此の如く特書する程のものなし然れども其祖先が地下に埋れて今日の石炭と化し以て十九世紀文明の一大要素となり我等尚其餘澤を受け居る事を思へば羊歯の効用又沒すべからざるものなり豹は死して皮を殘し羊歯は死して炭を殘す羊歯の功又大なりと云ふ可し

聖賢の行

聖賢に成らんと欲する志無く古人の事跡を見迚も企て及ばぬと云ふ樣なる心ならば戰に臨みて逃るより猶ほ卑怯なり朱子も白刄を見て逃る者はどふもならぬと云はれたり誠意を讀み其の處分せられたる心を身に體し心に驗する修行致さず唯个樣の言个樣の事と云ふのみを知りたるとも何の益無きもの也予今日人の論を聞くに何程尤もに論ずる共處分に心行き渡らず唯口舌の上のみならば少しも感ずる心之れ無し眞に其の處分有る人を見れば實に感じ入る也聖賢の書を空く讀のみならば譬へば人の劍術を傍觀するも同じにて少しも自分に得心出來ず自分に得心出來ずば萬一立ち合へと申されし時逃るより外有る間敷也

(西郷南洲)

史談

アグチス、ゲリーン

在京都　紫櫻生

英國「ウエストモーアランド」州と云へるは名高き山國にて、「ランクデール」の連山斜走せり、此山脈中多くの溪峽あるが中に「イースデール」の溪は下りて「グラスメール」村となれるものにして、此溪より流るゝ愛らしき小河は歌ふが如く、風なき時は洋々として宛然鏡にも似たる「グラスメール」の湖に注げり、谷は緑の草の天鵞絨の如きにて蔽はれ、早春群羊の遊ぶを見る處なり。此「イースデール」谷を崎嶇たる石徑に沿ひて一里許りも上れば山頂「ファー、イースデール」と呼ぶ處に至る。昔し此處に「ブレンタルン、ガイル」と云へる一軒家ありけり。(「ガイル」とは水蝕作用によりて作られたる岩窟、「ブレンタルン」とは盲池の義にして此家の上方なる岩に元と水溜りありけるが當時乾き涸れて僅に其跡をのみ止めたるゆゑ斯く取りて家の名となせしなり。)

此家は「ジョルヂ、グリーン」と云ひし老兵の退隱處なりき。其妻は强壯にして賢き女子なりしかば、常に家内の整理を善くし、雨雪等にて甚だしく道の壞れざる限りは其子供を「グラスメール」の學校に通へしむるを怠らざりけり。斯くて將來の希望に其日其日を樂しく送りけるが、一千八百〇七年の冬の或日「ラングデール」の農家に家具を競賣する事ありけり。此山里にかかる事のあるは實に稀なれば、遠路をも厭はず近村の人々皆集り來れり、中にも老人等は此時を機會に三四ヶ年此方出遇はざりし友と此世にては最後の會合をなすもありき。かくも珍らしき機なりければ、此日の好天氣なりしを幸ひ、家には「アグチス」と呼びし僅かに九歲の少女を初めとして、其他五人の子供を殘し置き

つゝ、「グリーン」は其妻「サラ」と共に早朝「ラングデール」を差して出立ちにける。「アグチス」は山の上の一軒家に殘されしのみか、奴僕もなく「グラスメール」村まで行かでは隣人もなきに五人の幼兒を托せられて大に困じたれど、忍耐強く、謹愼なる少女なりしかば、不平にも思はず、子供等を慰めて其日の晩方までも穩かに過しけり。然るに暮色漸く至るの頃、狹霧は谷間一面を蔽ひて、風の歎聲を漏すが如きは暴風の來らんとするを示すに似たり、子供等は其父母の事のみ念ひて氣忙はしく、待ち望みける間に、やがて霧も消へ失せ、鵞毛の如き雪片嵐に雑りて降りしきり、眼の達く限り暗黒となり去れり。斯くてあるべきにあらねば、「アグチス」は他の子供等に粗末なる夕飯を與へ、爐の邊に圓坐して、丘のわたりに人の聲せり、否な風の音ならん、など互に語ひつゝ待ち詫び、早や夜も更けぬれど、戶口に足音なく、戶を叩きて開かんとを求むる聲もなく、鐶に手を掛くるものもなく、只雨戶を漏れ來る風寒く、窓を打つ白き鵞毛の暗の中に見ゆるのみなりき。「アグチス」は弟妹等を慰めて、眠らしめんとせしかど、彼等は淋さ、恐しさに爐の邊を去らず、種々に諭し宥て漸く孖なりし最幼の二子を眠せ置きて、再び元の坐に歸り、二人の弟と「カザリン」と云ひし一人の妹と共に十二時過る頃までも待ちけれど、終に父母の足音なかりしかば、各祈禱を捧げ、專一に上帝の守護を念じつゝ床に入り、他の子供は日中の疲れに、やがて眠に入りしが、「アグチス」は獨り眠る能はず、兎や角と案ずる内に冬の長夜も徙り行きて、新たなる日を迎へけり。新らしき日は迎へたれど、父母を迎ふる事なく、昨日に增して烈しく降る雪より外に、訪ふものなし、されど「アグチス」が望の糸は猶斷れず、彼れは昨夜父母は雪を避けて或る羊舍に宿り玉ひしならん、或は雪と嵐の烈しかりしため、「グラスメール」に

回りて彼處に宿り、今朝彼處より歸り玉ふなるべしなど思ひて、自ら慰め、弟妹等を醒して衣物を着せ、祈を捧げしめ、朝餐を與へぬ。なほ父母の歸らざれば、彼れは「グラスメール」まで下りて樣子を窺はんかと思ひけれど雪のために山徑壞れて通行すべくもあらず、又其道に横はりて流るゝ溪河も雪に蔽はれて何處とも分別つかざれば、如何んとも爲んすべなく、淋しさは愈よ加はりて堪へがたかりしが、斯くては己に賴れる憫れなる五人の弟妹の悲も盡る所なかるべく、又假令自ら村まで行きたりとて何の益にもならざるべし、愚なる思ひに耽らんよりはと思ひ返して、先づ其なすべき務をなさんと決心し、第一にかゝる淋しき時等には最良の友たる時計の捻を卷き、次に少し許り殘り居りたる牛乳を腐敗せざる樣に貯へ、肉を燒きて食事の用意をなしをき、菓子を作りて子供に與へたり。之れより雪の爲に塞りたる道を開き、二人の弟の力を借りて一週間用には充分なる薪を集めて戸内に入れ置き、餘り多く貯ふれば倉の内の温きため腐りを生ぜんとを慮りて、一度の菜に足る程の芋を掘りて持ち歸り、牛にも秣を與へぬ。斯くする内に此日も又暮れて、夕飯時となれり、飯も終りぬれば、此親切なる慈母の如き少女は幼なき孖の衣物を脱がしめ、山里の面白き子守歌もて眠に就しめて、昨夜の如く他の弟妹等と共に爐邊に坐して、父母の歸りを今か今かと待ち詫びつつ、雨戸を打つ風の音にも、父母今こそ歸り玉ひたれと喜び勇みて、動氣を打たしめ、やがて心靜まりて、善く聞けば再び聲なきを覺りて、慵く思ひなどする間に夜は吹きすさむ、嵐と共に更け行きて、早や眞夜半となりぬれど、戀しき父母の聲を聞かで、終に床に入れり、此夜彼れは如何なる夢をや見たりけん、父母の慈顔は見ざりし乎、其懷かしき聲は聞かざりし乎、彼の恐しき雪崩は見ざりし乎。彼れは空しく三日目の朝

を迎へけり、雪は愈よ深く積りつゝ、嵐は益々烈しく荒れつゝ。今は「アグテス」が忍耐の焔も消へなんとして何故に父母は歸り來まさぬぞ、父は元より母とても、彼の强壯の身躰故若しも異狀の……なかりせば、如何で歸り來まさぬ事のあるべき、などゝ思ひつゝも、昨日一昨日も變らず、其弟妹等と共に爐邊にて、悲しき話しを續け、神の瞑加を祈るのみなりき。

四日目には降雪止み、風は吹雪を拂ひ去りて、未だ充分なるにはあらねど、畑の周りの石垣の見ゆる樣になりたれば、「アグテス」は此石垣に沿ひて曲り曲りたる危き道を辿りつゝ、「グラスメール」の入口の或る家まで達するを得ぬ。心は燃ゆる許りなれど流石落付きたる少女なれば、少しも噪ぐ氣色なく、戶口に立ちて案内を乞ひ、迎えられて、坐に就き、最と物靜に、父母の事を問ひけり、種々と少女の物語るを聞くがまゝに、此家の主人も憫れに思ひて、彼方の鄕より此方の鄕を聞合はすれど、村の人々皆な「ラングデール」の競賣の晩に分れしより、未だ「グリーン」夫婦を見ずと云ひければ、さては捨て置き難き一大事とこそ出來たれとて事の委細を近村に傳へ、やがて六十餘人の剛者を、「カークタウン」村に集むるを得たり。「グリーン」夫妻の探索に日數は重なりぬれど、何の徵もなかりけり。巧智虛飾の染まざる山里の事とて、村人は凡て其職業を止め、三日――或人は五日なりしと傳ふ――が間雪深き「ラングデール」の山々を歩み回りしなり。最早人力にては到底探し得られじ、如何すべきと人々案じけるが、或る一人のものゝ、勸により、犬を用ゆる事となり、終に其助けによりて、「グリーン」夫婦は見出されたり。「サラ」は夫の外套を被りて絕壁の上なる老松に倚れたるまゝ死したるものゝ如く、「グリーン」は步を誤ッて、其絕壁より落ちたるまゝ氣絕したるが如くなりけり。あゝ曾て「アグテス」等が爐邊に父母を待ち詫

びし時、人の聲を聞きたりと思ひしは、誤りならで、實、母が臨終の苦みの叫びなりしならんか。家に殘されて、父母の歸りを待つ少女の忍耐と、大雪暴風の眞夜半に、嶮き山路辿りつゝ、心許りは急げども、足趨らず、此世の永き別れにも、子供の顔を得見ずして、悶え死したる母親の心の中は、何れか哀れならずとせん。

其後「アグ子ス」は「ドロシー、ウオールズヲールス」（彼の有名なる大詩人）「ウオールズヲールス」の姉妹の請に應じて、其數日間の苦しき經驗を語りたりしが、明る春の長閑けき日に父母の死骸をば「カークタウン」なる聖「ヲスワルド」寺院の墓場に葬り、「ウオールズヲールス」其碑文をかけり。

葬式も終りたれば、村の人々、我こそ此憐なる孤兒を育つべけれとて、爭ひけり、「カザリン」は「ウオールズヲールス」家の養ふ處となり、「アグ子ス」其他の子供等も各々其父母の友の家庭にて何不自由なく育てらるゝに至れり。此美談終に「シヤーロット」女皇陛下及び諸内親王殿下の聞し召さるゝ處となり、女皇陛下を初め殿下には「アグ子ス」が大人なげなる心に甚く感じ思し召さるとの事にて種々の賜物送り與へさせられたりとぞ。

貧のなる木

天保年間曾根勘右衛門書

抑も貧乏のみのなる木はもと困窮木といふひがめる木にして不自由洲左前のつまらん國といへる乏しき所より出たり昔者貧する損者と申貧惜つよき羅かん有て節季山といへる難遊の山をこへて大借金てう迷惑の海を渡り無仕方といへるへ極廻り平氣といふ所に落ち着き晦日の闇のむちや〳〵に貧乏種をまきて茅屋背家にいたるまでも金借さばかたドけな木貸さればれたまし木儲促すればうらめしき木せざれば心よ木返さずに仕まひた木證文がもらひ木などいへるあつかまし木上にふんでやりた木たなした木慾深木に打添へて暮しがた木凌ぎにく木さても苦るし木う水つら木是はかなし木せつな木さきに殊になげ木の繁りつゝ面白くもな木言譯にうそさ八百の彩し木らちもな木林とは成にけり此林より分入て見れば御無理にはあらず御尤ながら此度は

かりはなど〻追従輕薄の身たち〻めてみすぼらし木浮む瀨もな木ふりの見にく木數々の枝ぶりありこれを根元より思切りたさへ一ト月二タ月たり共借錢の芽をつみて借の葉を枯し奢の花をさかせず不實の實を結ばざる樣かんなん辛苦を除き金のなろ木さうゑかへよ

文藝

霜がれ薄

葛衣

何時頃、何時の折にか、誰がくはだてに繕はれつる、荒れにあれ、すさみにすさんだる一座の古廟、檐傾き柱曲みて、蛞蝓のあと、歷々なりけんとおぼゆる、四邊の壁土、大缺頹落ちて、骨のみぞいた〳〵志げなる空隙洩れて、颯と吹下す何處やらの山颪しに、山積く散りしいたる、枯木葉を飛颺りて、さや〳〵と音するが、寢鳥の血にや飽きたる梟の、ほす〳〵と悲痛れなるに、打交ひつ〻、いとゞ淋しう悽然なり。

蓊蔚たる森の樹かげを洩れくる、十六夜月は、蒼白き光を露に落して、拜殿の柱に這ひ纒ひたる女蘿の、黄ばみたるが、折々可笑しげなる音して、打うめきつ〻裏葉見するも、憀慄や。

高くかゝげられたる偏額は、主なき蜘網にとざゝれ、見る影もなく朽ち、蝕みたれど八幡宮とは尙仿幽けくぞ讀まれぬ

峯上に牝戀ふ牡鹿の聲、とも呼びかはす野猿の聲はきこえねど、四邊さびたる晩秋の夜の色景、いづれか、斷腸のたねならざらむ。隱見る燈火の光は、小山がくれの賤の家よりや洩れくる、滔々として岩に激する水音は、程遠ふからぬ溪流の漲るにやあらん。

暫し吹き和ぎし山颪の、再び微かに梢をかすめて、やがて、消ゆれば、熊笹茅の友摺る音さや〳〵と聞えて忽ち現はれたる一個の人影。

何ごとぞ、夜半に衣一つ、それさへなかば襤褸に斷切

て穿てる、草履も破損じぬ。歳の頃は不明らねど、五十路には餘りぬべし、軀に病ひある者にやあらん、心喘もいと穩やかならず、踏む足さえに蹌踉と危ふし。そが肩上には何やらん小かなる荷物を負ひつ、そが上には一個の猿ぞ、物ほしげなる面色して、おのが衣の裾かゝげつゝ、坐したり。

『躊躇とて甲斐もなし、遺憾さは盡きねど』。

怪しの男は、斯く慄しげに獨語つゝ、袂かいさぐりていと小さなる果實取出て、やをら猿に與ふれば、嬉れしげに聲あげつゝ、空打見あげて掌中に受けぬ。

月を眺め猿を眺めて、悄然たる怪しの男は、靜かに階段の上に猿を下しつ、二三歩引さがりて、枯艸の上に跪きつゝ、暫時何をか祈りけるが、やがて懶げに身を起し、朽ちたる椽に先の程より、はや食ひ終てたる果實の皮弄びつゝ、尙あと戀しげに主の方打まもる彼猿を、我膝の上にかき抱きて、はら／＼と淚を落しぬ。

『あゝ……もう五年の昔しになる、女房に逝かれた來年の夏から、心を盡し力をつくして、養育あげた貴樣に、別れるのは……悲ひとも何とも言ひやうはなけれど、前世の因果が今報ふてか、此不治の難病……後ろ指さゝるゝ此病ひ、二歳の光陰をとやらこうやら送つては來たものゝ、先月の初めからといふものは、足腰きかぬ不甲斐なさ、貴樣に稼いで貰ふにも、我が添ふて往かねば、何もならず。一歩いつては息をつき、二歩めには骨身に染みる其苦痛、人交はりもならばこそ、猿舞はしの彌吉は癩病者だと、小兒に迄馬鹿にされる口惜さ、我はもとより貴樣にも、粥を啜らせるのも日に一度……他には菓子切れ一個食はせる力も無い悲しさ、腕も細くなつた、顴骨も高くなつた、彌吉の猿と言つては、同業者でも一二を爭つたともあつたに……。』

はふり落つる淚を破れたる袖にうけて、猿の頭を撫り

ながら『蒲團の上に横臥て居ても、氣にかゝるは貴樣のと、貰ひてを探したれど、誰も彼も、癩病者の猿はと躊躇ふんでの無慈悲者ばかり、此頃も、貴樣が對家の菓子屋に登つて乾菓子を竊んだとか何とかいつて、大の男が鷲掴み、打擲やら蹴やら、……無邪氣此畜類を捕へて、おゝ此額の疵と背後の疵の六きさ。衣服も去年新調えた時には、窮屈の樣であつたに、僅か一歳たつかたゝぬに、綴くなり、紅染の摸樣も褪めて汚穢なつた。』



悵然として、仰視ば、水の如き皎たる月は、森を斜めに、空に輾り、燦爛星の數さへげく、靡く葉蔭に見えつ隱れつ。夜は更けぬらし、滔々たる、急流の音のみ高く、四邊茫として、白らけ渡りぬ。

『若し我が死……いゝや我が居なくなつたら貴樣は如何するヿであろう、癩病者の猿とて養育者も無く、食を恤んで呉れる人も無くば、命をつなぐとも出來まひ、餓えて死なずば、殺されて啖はれるは定のものと、思ひ廻す程別れかねて、一日一日と送りは送つたものゝ、少些ばかりの貯蓄も、今日といふけふ消費して、明日からは、貴樣も我も……粥さえ……粥さえ……啜れぬ……啜れぬ始末……見す〱貴樣を死なせるは如何しても我には出來ぬ、あゝ如何したらばと考へれば考へる程、明案も出ず、いつそのヿにと、決心て八幡社まで來は來たものゝ、生れおちるから育てあげて、藝も通常はづれて教みあげ、我の枕邊に坐つて、言葉こそ言はね、水や湯を持つて來て呉れた貴樣に別れるのは。あゝ口惜のは此難病……此病氣さえでなければ……鶴よ貴樣にはもう別離るぞ、八幡樣によく貴樣のヿをお頼のみ申たれば、大丈夫、我は神樣の御罰で此難病を得たれど、貴樣には罪もなんにも無いヿ故、やがて好主人に救はれるだろう、藝をな、よく忘れずに、新主人に惡まれるなよ、我儘をいつてはいけないぞよ……先程古箱を探して、五厘の銅貨を拾ひあて、やつと買つた柑が、まだ一個ある、今日は朝から水粥も食はないから、さぞ腹がへつたであろうけれど、是をなたべて……あゝもう時がうつる、餘波は盡きないが、別離るぞ、鶴よ々々、壯健で居ろよ……。』

はら〱と降りかゝる涙の雨を、面に受けて不審しげに、剝きかけし柑皮其まゝに、仰視たる猿を、彼男は堪えかねてや抱きしめつゝ、男泣きに泣きたふれぬ。

やゝありて軀を起し『いつ迄泣いて居たとて盡きるものではなし、鶴よ我はもう去くぞよ、呉々もとんだの主人に悪まれるな。』

力なげに起ちあがりつ、蝕みたる柱を危ふくも、痩せ細りたる手に拄えながら、蹌踉として階段を下れば、いづこの寺の鐘にやあらむ、二つまでぞ撞き響かせたる。

『あゝもう二時か。』言ひつゝ彼は、猿を扉の骨に結びて、尚ほ幾たびか頭を撫で、夥多たび神前に頓首つゝ暗涙を袂にはらひ、悄然として、言葉なけれど、弱る心に鞭やあてけん、やをら踵を返えさんとす。

無心畜類も、馴れ親みし主人が今夜のさま、何となう怪しとやみけん、掌にせる果實も、なかばは食ふべき、散りたる木葉を、三四葉、後左手に弄びつゝ、淋しげに傍打見まはせしが、主のさまを何とや見し、つと身を起しざまに、手にしたる果實をはたと投げ捨て、悲しげに高く叫びぬ。

『おゝ離別るのが悲ひか、おゝ悲ひだらう……鶴よ貴樣と我とはな、もうなんでも無い……他人も同じことな……明日からは甘美ものも充分食はれ、此樣汚い衣服を捨てゝ……おゝ其やうに鳴いては我が困る。』

さらでだに、別れかねたる彼男は、鳴きたてられて、いとゞ心の弱るらん、斯く言ひさして、咽び入ぬ。

夜は益々更けぬ、梟も寢ねやしけん、小枝搖がす音もせず、ほんのりと光を梢に落せし月も、はや山の端にかくれたりける。露は深く、風は寒し。

『おゝよく聞きわけて、鳴き止むだか、夫是をたべてないゝか鶴よ、決して新主人に悪まれるな、若し悪まれでもすると、我は成佛ない　なに我は死にはしないけれどな　好都合に昨日の雨に水量が増えていれど、夜があければ減るかも知れぬ、健康でいろ

よ、別れるぞ……。』

樹間の暗に、姿も聲もやがて消えて、殘るは淡き曉の星。朧の闇に迷ふ悲哀の聲。岩角を嚙む溪川の流聲。

＊　＊　＊　＊

朧のやみを縫ひて迷ふ悲哀の聲は、草吹きひらく山颪に、消えてゆく〳〵誰が手にか、その命をばとり止むらん、そもやよるべをいづこと定む。（をはり）

狸の話（下）

園部紫嬌

狸の家では、子狸が、晩れ方フイと飛び出したまゝ、待てど暮らせど歸つて來ないから、親狸はそろ〳〵心配を初めました。

父狸『オイ、女老狸、アノ餓鬼は如何した。

母狸『さうさねい、晩方出たつきり、まだ歸ねいよ。

父狸『如何したんだな、餓鬼め、悪くすると狼の奴にでも喰れやしねいか。

母狸『なんだねい、縁起でもねい。マサかそんな事はありやしめいが、心配だから、お前一ト走り行つて見ておくれな。

ソレがよからうと父狸は直樣穴を飛び出して、あちらこちらと捜しましたが、一向見つかりません。如何した事かと血眼になつて、向へ行き掛る途端、ウー〳〵と唸る聲がします。扨ては狼かと己れ先づ膽を潰しましたが、よく聞けばさうでもない、段々近づいて見ると、我子の子狸です。ヤレ嬉しやと駈け寄ると、子狸は、喜んで

子狸『父よく來て呉れた、己等兎ちやんの月の宮へ上るのを見て、あんまり吃驚したもんだから、腰が拔けた

父狸は、先づ安心して、

父狸『そうか、馬鹿な奴だな—手前は、お母と二人で

如何な心配したか知れやしねいぞ。
と或ひは喜び、或ひは怒つて、子狸を背に負ひ、穴に連れ込みました。母狸は待ち兼しことゝて、足音の聞ゆるや否、飛んで出で、

母狸『オヽ善く歸つた〳〵、

と早や涙ぐんで居ました。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

兎の上天した跡は、暫く空穴となつて居ましたが、程なくして狐の棲家となりました。狐は兎と異つて、性質といへ、形といへ、大に狸と似寄つて居ります。ソコで狸は好隣保を得たつもりで、頻りと交際を始めました。

狸『此處らは、不自由で困るだらう。

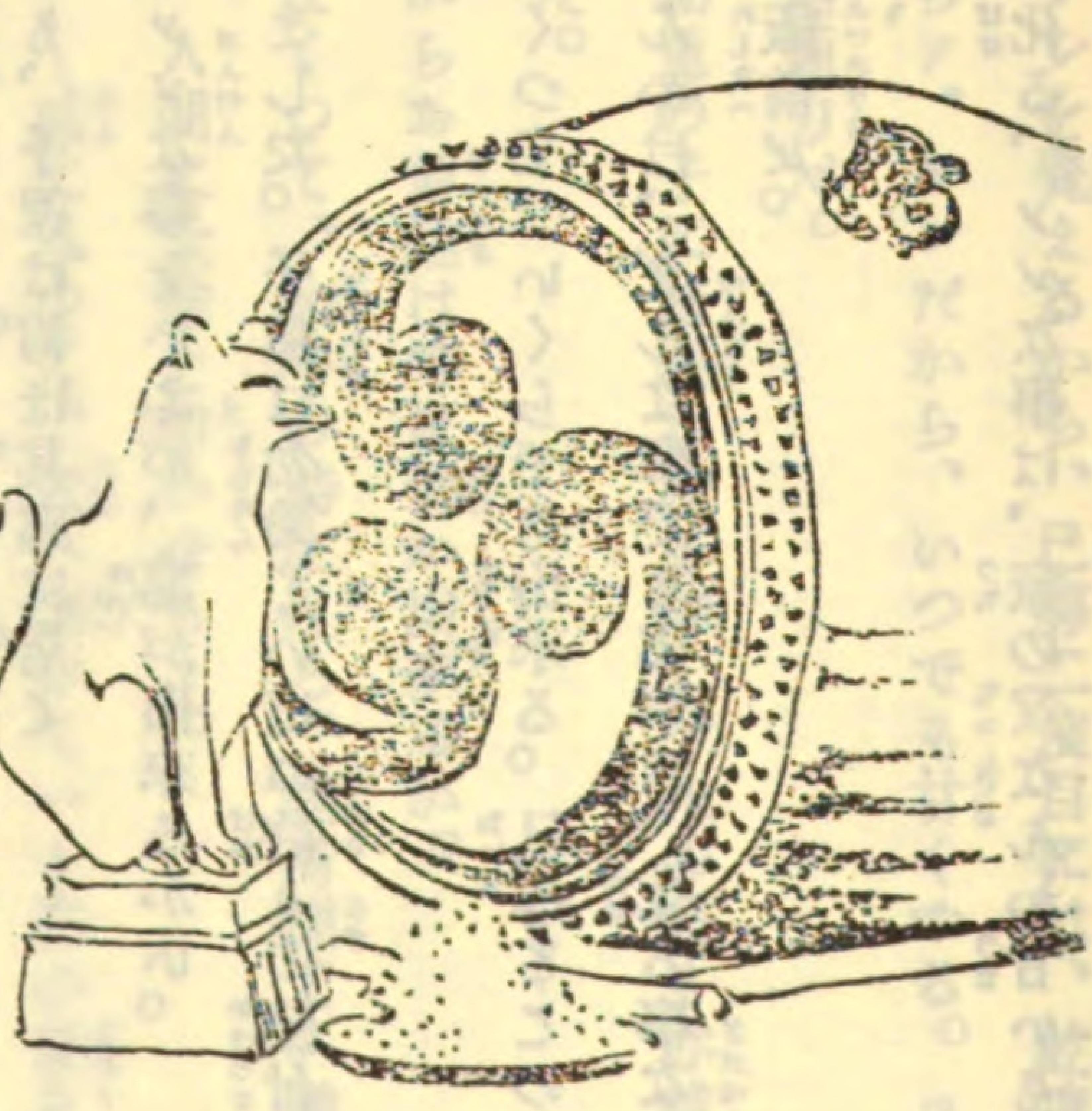
狐『ウンニヤンソなでもねい。

狸『子供は何匹だい。

狐『三匹だが、どいつも腕白で困るよ。

狸『ソレは結構だ、己等は一匹しッきやねいが、意氣地なしで困つちまア。

狐『そうか、何んでも温順しい方がいゝや、時に遊びによこしねい。



狸『ア、よこさう。

スグとコソな具合に心安い中となりました。併し狐は、狡猾な奴ですから、腹の中では、極めて狸を馬鹿にして居ました。

腰の抜けた、子狸は狐の引ッ越して來る時まで、寝所

に臥つて居たが、段々癒つて、今では元の通りになりました。

親狸『オイ小坊、隣りの狐公のとこ行つて見や、手前の友達がいくらも居るよ。

子狸『そう、ぢや行つて見やう

と子狸は喜んで行つて見ると、居るは〳〵、三匹とも黒鳶色の衣物を着て。

子狸は、固より馬鹿ものですから、今日はとも何んともいはず、ノソ〳〵と傍へ行つて、遊ばうや〳〵といふと、子狐は、

子狐『ア、遊ばう、時にお前何の藝が出來る？

といひますと、子狸は頭を掻きつゝ

子狸『己等か、己等は何にも出來ねい。

と答ひました。スルと子狐は

子狐『ソウ、お前何にも出來ねいのか。ソンぢや遊んだつて、面白くねいや。

と一向合手にしません。子狸はそれでも遊びたいのかして、なか〳〵其の場を立ち退きません。子狐は稍々腹立しげに

子狐『己等、お前と遊ばねいよ。

斯くいはれても、子狸は尚ほ其處に居て

子狸『お前等ソンな事をいふが、藝が出來るかい。

といひ返へしました。子狐は勿論といはぬ許りの顔付にて

子狐『出來なくつて、いくらでも出來る。己等とこの父やお母なんかは、どんな事でも出來る、化る事なんかは、朝飯前だ。

いはれて子狸、

子狸『なんだ化る、ソンな事は、家の父なんか甘いもんだ。

とやり返しました。スルと子狐は、

子狐『お前の父なんか、いくら化たつて、まだだめよ。

まだ幾日も前ぢやねい、お前の父が、幽靈に化けて、寺の門の前に立つてると、夜廻りの寺男が、巡つて來て、一度は驚いたが、よく見ると尻尾が下つてたもんだから、狸だつていことが知れて、拍手木でいやつてい程なぐられたつていぢやねいか。ソレだものお前なんか、いくら威張つたつていけねいや。

子狸『ナァーにソンな事があるもんか。

子狐『お前はボンヤリだから知らねいのよ。ソレぢやモ一ツいはうか。お前の家の十八番は、尻尾を寺の戶の節穴に入れて、拔いたり出したりして、ヅボー〳〵と音をさせるんだらう。コレはお前の家許りぢやねい、親類中誰れでもしねいものはねい。ソレをお前の叔父だとかいつたけ、此の山の後ろに棲んでる奴は、いつも行きつけの寺に行つて、此間の晩、ヅボー〳〵とやつてると、ソコの坊さんは、なか〳〵强い奴なもんだから、スグに尻尾を捉まいて、鉈でぶつたぎつてしまつた、ソレでお前の叔父狸は、一生を化られなくなつたよ。己等、ナンボ何でもソンな頓間はしねい、人間ていやつは、一變やつて見せるとスグソレを覺えるから、己等二度目には、屹度風を變へらァ、ソレだから、いつでも甘くやる。コレが狐の變通力だ。

子狸は、當初兎の子に感服したる如く、此の時も亦感心致しました。

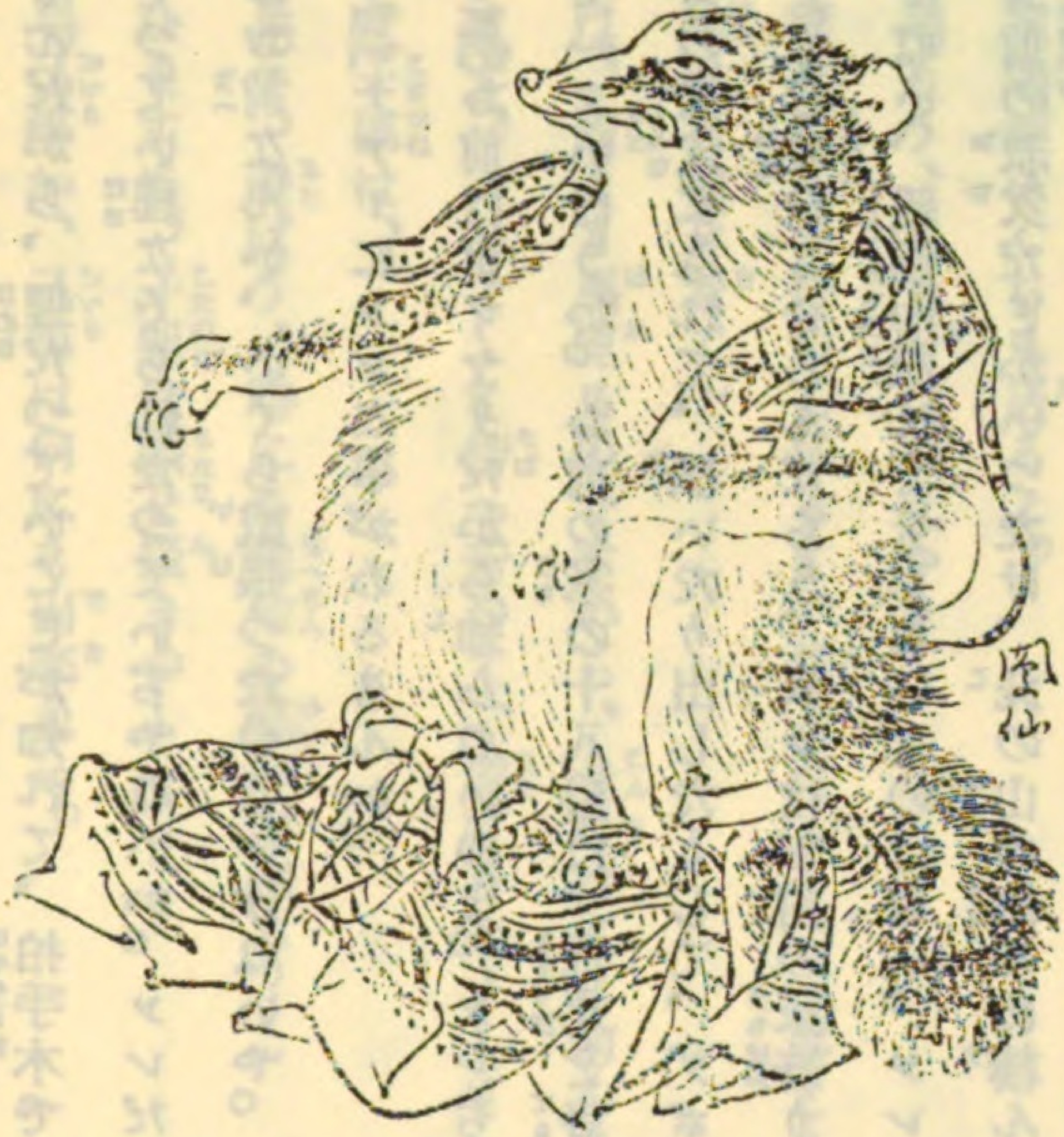
子狸『ソレからお前達は外に何か出來るか。

子狐『出來なくつて、初午の時に見ろ、稻荷樣てい神に化けて、人間に太皷を叩かせらァ。

子狸はホト〳〵感に入つて、穴へ歸つて一々右の話をしますと、親狸は少しムッとしました。

親狸『手前は何故ソンなに馬鹿だ。父や叔父どの事を惡くいはれて、ソレを感心する奴が何處にある。狐なんぞは、化るなんて、あんな事は、皆な虚だ、又

初午の太皷だつて、そうぢやねいか、人間が叩くんだ。見や、父なんざァ、自分で自分の腹を叩けば、ポン／＼と太皷よりいゝ音がする。



親狸は斯く子狸を叱りつ諭しつしまして、此の晩はソレで仕舞ひましたが、狐に言はれたことが、如何にも殘念で堪りません。いつか讎を把つてやらうと其の折りを伺がつて居ます。

二三日經つと初午です。狐は此の日すみつかりややおこわの御馳走になれることですから、一家殘らず里に出ました。狸は、此の出て行くのを見て、今夜こそ一番讎を把つてやらうと思つて、親類のものや何にかを呼び集め、狐の跡を追つて里に出ました。

狐は、秩父下の大稻荷の社に入りまして、澤山供へてあるすみつかりややおこわを甘さうに食べて居ます、其の前には氏子の若者が寄り集つて、太皷をドン／＼叩いて居ます。

此方には狸の一族、狐の甘い物を食べるの指を啣いて行て居ましたが、其の中に日は暮れ、段々腹は飢つて來る、ソレに太皷は益々音高く鳴り響く、狸はソコで腹太皷を打ち始めました、ケレドモ晝間から、何にも食ないから腹が思ふ様に膨れません、從つて音も低う御坐います。然るに彼方では、此方の太皷が聞へるも

のですから、頻りと打ち叩きます。狸は、一生懸命です、膨れない腹を、生一杯吹き膨らせて、ポンポコ〳〵力限り、魂限り打ち叩きます、彼方でも此の勢ひに一倍音を高め、孰れも負けず、劣らず叩き合つて居ます中、狸は終に無中になつて、叩いたものですから、到頭腹を叩き破つて終ひました。是れが狸のお話です。狸といふやつは、何と馬鹿ではありませんか。

天下泰平國家安全

維新前播州姫路に内海米成と呼ぶ歌人ありけり、某侯其歌才を試みんと其邸に招し「天下泰平、國家安全」の八字を歌にせよと命せられしかば米成直ちに

君が代は高き枕に臥しにけり
　みやまの奥の賤の男までも

侯之を聞きこれにては普通の歌なり、直ちに此八字を詠せよとありき、米成尙ほ其意を解しかね上意に隨ひ

文字さへへんのなきこそめでたけれ
　天下泰平國家安全

と詠したるに否直ちに八字を歌にせよとの命あるに米成始めて侯の心を察するもの丶如く

天下泰平國家安全（あめのしたやすらけくたひらけくくにといへどはやすくまつたし）

かく和調を書き添へければ侯深く感賞ありしとなり

談叢

瓶中の黄金（上）

金子春夢

東京麻布六本木に近き、或町に其界隈に名高き家主ありけり、何故に名高きぞといふに、二十幾歳の壯年より今歳五十の齢を重ねしまで、食ふものも食はず着るものも着ず、いはゆる爪の先へ火を燈してぽつ〳〵小金を溜めしか、塵もつもれば山となるの比喩に漏ず、今では長屋の一棟も持ち、人より家主樣とあがめらる丶身となりけれども、三軒長屋、一軒並に一圓五十錢づ丶の家賃あがればとて五圓に足らざれば、傍近所の貧乏人に一圓未滿の小金を高利に貸しつけ、日々怪氣

な革鞄を提げて路次口を往來し、日歩をはたり立て丶己が腸を肥しぬ。

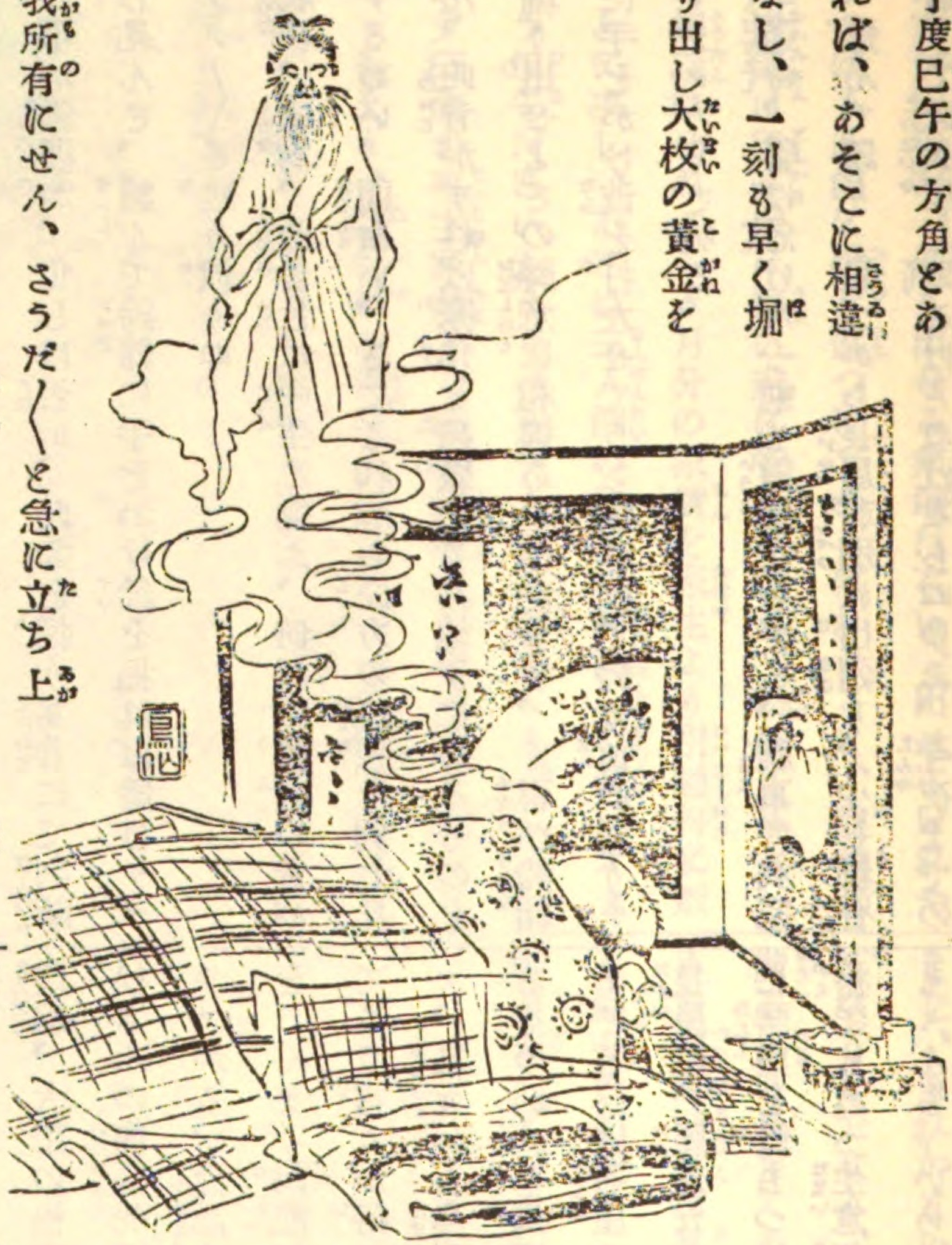
其名を赤西林藏と呼びて、四五年前までは女房を持ち居たれど、餘りに林藏の吝嗇なるに愛想をつかし其家を逃げ出しぬ、吝嗇一遍の林藏、女房が居なくなれば一人口減りし上に、うるさい小兒はなし、結句これが安樂なりと喜び、其後は茶呑連も迎えず、どこからか食はせてさへ置けば給銀の要らぬ、穢なAらしき老婆を雇ひ入れて臺所の事をさせ、自己は金の溜ることのみを工夫しける。

貧乏人へは高利で責めはたり、店子へは一日屋賃が遲るれば、表より我鳴ちらし、疊へ燒痕一つこさへても生命でもかゝるやうな事をしたかと思はるゝほど八かましく、此長屋に住む店子は無事に引越したること嘗てなし、立つ鳥あとを濁さずといふ敎訓はあれど、林藏の邪慳に逢ひては誰でも喧嘩面して引越仕度をするもの多かりき、かゝれば林藏を目して非人め、極道めと呼ぶ名が通稱となりぬ。

神は非禮を享けたまはずとあれど、林藏黃金の欲しさに餘り芝西の久保八幡宮に參詣し、南無八幡大菩薩、病難、火難、盜難、女難一切の災難拂はせ玉へ、其代り黃金責はあひなるともさら〳〵厭ひ申さずと一心不亂に信心しけるこそ殊勝なれ、かくて或夜の夢に日頃信ずる八幡大菩薩明〻と枕頭に示現し給ひ、林藏に申しけらく、汝我を信ずる志の厚きにより、汝に效驗を與ふべし、汝の家の巳午に當る汝の所有家作の地下に黃金を藏めたる大瓶あり、汝疾く堀り出して速に所有とせよ、遲れて神慮に違ふ勿れと、言ひ終り神躰忽ち消ゆるかと思へば、これなん林藏春の夜の一夢にてありき。

此夢を見て朝から林藏腕を組みて考ふれば、巳午の方とは、さてどこだと首を傾け、ハタと膝を打ち、分か

つたく、さては今歳は歳徳巳午の方に當る、して見ると己の所有の地所には三軒長家の外に一軒もなし、丁度巳午の方角とあれば、あそこに相違なし、一刻も早く堀り出し大枚の黄金を我所有にせん、さうだ〳〵と急に立ち上りしが、まてしばし、土地を堀り返へすことは易けれども、あそこには家作あり、それを取りこはさねばな



らずこれは一つ考がへものだが、併し此の儘にして置けば神慮を無にするといふもの、それに昨夜の夢は確かに正夢、八幡様が我が日常の信心を愛でゝワザ〳〵此處まで來たまひしに相違なし、お顔もお姿も今でも歴々と覺へて居る、鼻が高くて髯があつて、十圓札についてござる何とやらに能く肖てござる、必らず靈夢だ、必らず神慮だ本當だ、若し神慮に戻りて火事でもあつたらそれこそ大變、なによし、長屋の粗忽奴が火事を出しやァがッて丸燒になつたと思へばどうでも諦めはつく、さうだ〳〵と早や夢中になり、先づお禮參詣と早朝から湯屋に行きて身を淸め、これにて六根淸淨と、それより西の久保なる八幡宮へ詣で、平生よ

りも奮發して二厘錢五つゝも賽錢を投げ、目をつぶり口の内にて諄々々唱へて、さて心に思ふやう、昨夜の事が靈夢か、但しは否か、此鈴を振り其音にて判斷し見んと、謹んで鈴緒に手をかけ鈴を振れば鈴はチャラン〳〵と鳴り渡りぬ。

成功、成功、此音色は平生と違ふ、何だか黄金の音がするわい、面白い、さてこれから此方の思惑を判じ見ん、此音がすれば家作を破毀して其地下にあるものを掘り出せよとの神意に相違あるべからず、と再び鈴緒に手をかけ波を打たせてうち振れば、鈴は前の通りチヤラン〳〵と鳴る。

幸運命、善は急げだ一刻も猶豫ならずと、腕車で我家へ飛んで歸り、自づから長屋軒別に出廻り、少し都合ありて此長屋を取こはさねばならぬゆゑ、今夜までの中に立除て貰ひたし、前家賃の餘分は日割で差戻すと、はや側から退立つるやう、厭とでも言はゞ疊でもめくり兼ねぬ權幕なれば、常から厭な家主であり、はい〳〵と店子は答へて林藏を返せしあとにて三軒の長屋の内儀達、大工の松さんの家にて會議を開きぬ。

松さんの内儀先づ口を開き、あの因業爺め、何を言ひやァがる、糞忌々しい、唐突に立除けなんのッて、人をあんまり馬鹿にするよ、都合があるならあると前以てさう言ふが好いさうなら此方も大人しく聞いてやらア、足元から鳥が立つやうに今夜までの内に立退かれるものか人を馬鹿、己達は家賃はキチン〳〵納めてらアと言へば石屋の内儀、曰く、さうだとも〳〵こんな長屋に、賴んだッとて住んぢやヤやらねへが仕方なしに神輿を落ちつけて居るのに、先方から立てなんて、格にもねへ生意氣な、毎度好かねへお丹珍さ、禿爺奴、もゝんちいめと長羅宇に煙脂の詰りしをポン〳〵はたく、吐月峯こそ好い迷惑なり。

お前達そんな惡躰をついた所が始らねへ、どうとか

したが好い、あんな愚人にからかッた所が賞めた事でもねへよ、それよりか、引越料でも蹈だくッて立除いた方が得策だ、迚も出せる氣遣はない、出せなけれややつぱり此儘に腐を落つけてやるばかりさと、塗物師の内儀は年高だけ旨い處に智恵がつき、孰れも亭主へは相談はせねど一ヶ月分の家賃を家主より引越料に取るに決し、あとは三人例の如くの高話 高笑、オヤもう正午だといふまでべちや／＼を續けゝり。

其夕三軒の亭主家業より歸り相談の上引越料を取るとゝきまり、塗物師の内儀此全權を帶びて家主の家へ行き、こつちもちつと都合あれば、引越料一ヶ月分の家賃を軒別貰はねばいつまでも立除かぬ、併しそれさへしてくるれば今夜の中に引越すと辨に任せて述べければ、林藏急にせき込み藥罐天窓に蒸氣を煮立てゝ腹を立て、内儀と喧嘩をしかけゝれば、ハイ左樣ならと内儀は早速此家を逃け歸りぬ。

林藏熟々思案するに、我有の長屋の奴等は食へぬ奴にてあんな噂もつき居ればなか／＼一通りでは立ち除くまじ、それかといふて手荒い事をしては却つて長々と延びるまでなり、よし／＼、大金を儲る山も見えてあれば、是迄人を苛めた罪障消滅に見事三軒に先方で言ふ通りの引越料を出して、



こゝは一番、赤西林藏樣の氣質を見せて遣るべしと、直ぐに塗物師に出かけて先程の事委細承知、其代り今夜の内に引越すべしと意外の返事に、さすが塗物師の

内儀も喫驚したり。
此事三軒の家に傳れば三軒の内儀當惑し、ナニ放擲て置くが好いのさと相談するを、大工の松は頭を掉り、先方がさう來ればこつちも男だ、今夜の内に引越すがいゝ、いつまで因業の家主を持つてたまるものか、引越料は好い鹽梅だ、とこれより三軒は申合せ、引越す家も見つけず、其夜の十一時過家財道具を積みて、知邊々々の家へ引越しぬ。
ヤレ〳〵これでさば〳〵した、僅な金であんな惡魔を追拂ッて仕舞つたから、もうこれから寳の山へ昇るばかりと俄に氣が大きくなり、それより林藏町内の消防夫に家作の破毀を委賴に行き、めでたく明日早朝からと、其夜は土中に埋みし瓶の事のみ思ひつゞけ祿々眠られず、古金銀を數ふる夢のみ見て數回眠を覺しぬ。」
明くる日は林藏雀と共に起き出でゝ、例の長屋の周圍を幾度となく歩き廻り、消防夫の來るを待ち詫びしが、八時頃、頭分は四五人の部下を連れて來り、直と破毀にかゝりぬ、消防夫は家屋を立て直すゆゑ一旦家作を取かたづけるとの林造の委賴なれば家主の腹中は知るに由なし、林藏は始終仕事の側へ附き添ひて、仕事の終るを待ちかね待ちわび、あつちこつちの空地の上面を棒杭て掘り見る心ぞ可笑かりける。

山代たみ女

たみ女は熊本藩細川侯の家士山代藤市の長女なり天性至孝にして毫も父母の命にさからはず弟妹三人あり次を萬喜と云ひ次を由女と云次を淸三といふ皆幼なき時より睦間敷物あらそふなどなかりけり當時父藤市は御勘定頭勤められければ家内は至つて出入多く隨ひて繁雜をきわめければ六七才の頃より母の助となり手習けいこに參るも朝の内にひる迄の仕事を成置午後に歸りて夫より志よたい向の事等を專ら勉强し十三四に至り

ては内事多きゆへに手習ふ事も師の元は引取家事其他つけ物又は織ぬいなど母のさしづを受てなしたとへむつかしき事なりともねつしんを以て成けるゆへよしあしになし得ぬと云事なし何事も父母の意にもどらず朝は早くおき夜は父母のいね給ひて後明日の志たくなどなし召仕の下女などもふしどに付しめ夫より續物とか手習などなし用事有て父母出給ふ時は留守中弟妹を愛し何事もおち度なき樣にちう意し髮なども自分はもちろん弟妹父母の皆夫〳〵に手一ツにてゆひ物見遊參等は父母をすゝめ弟妹を遣し自分留守をまもりて父母の樂しみ給ふを我たのしみとなし親類又は志たしき人は病人或は惡事などこれ有節は父母に願ひ自ら參りて身の及限り心の及ぶ丈け說きさとし心せつを以て盡し人のよき事は父母に告弟妹に聞せなどして善にみちびき又弟の讀書の跡さらへなどは人にゆづらず志らぬ文字は字引よりくり出し種ゝはげまして上達なさしめけり

自分のかざりなどを樂しみとせずきるい又は髮の結ひ樣など母むかしふうを好み給へば人の笑ふもいとはず其意に從ひてふゆくわいの色を少も志らせず父母に望がましき事けつして云ず父母人に哀みをかけ給ひ時としては自分の品をば人にあたへ給ふ事も折〳〵有けりされども父母のなし給ふ事は自分も歡び身の不自由は少もいとはず又父母の心に叶ひたる品は如何程大事なる品なりとも惜き心さら〳〵なし父若き時より至りて多病にして夜分など折〳〵ねむりに付ず左樣成時は夜半と云何時に限らずおき出てなでさすり或は本を讀四方山の物語などして後にはおのづとねむりに付しめ其後にして自分は其まゝ枕邊にねむりて有し事志ば〳〵なり又寒中などは父の足を自分のはらのあたゝまりにてぬくめなどしける父五十歲を越て公勤にて江戸詰仰付られ多病の身なれば家内の人ゝ心遣ひいはんかたなくされど重命もたしかたくして嘉永二年三月中頃江戸

え出立せられ其年の十月半頃より下地のしんけい病の上種〻病氣重り極〻なんぢうの由申來り其時迄は婦人の旅行中〻むつかしく紙面の取かはしさへ一ヶ月に二度より外はいか成大切成用事有ても出來ぬ時なれば宿許の心遣ひは申計りなく中にたみの心ばいは一入にして晝夜神佛に祈願懸身を以て父の病氣に替らぬ事をこひければ其孝心の愛しけん次第に心能して明年五月五日無事歸宅ありければ皆〻歡びのまゆをひらき父のつつがなき御禮のためにとて一七日食事はもちろん湯水をもたちて有けれども父母に其事をしらせず常と少も替らぬ樣にして立居振舞父母知り給はゞ心遣ひ給はん事を恐れ勤おこたらず又寒中となれば本妙寺と申所熊本より凡一里計の所に加藤清正公のぼたい所あり靈けん尤有しなり同御禮にとて二七日夜身に黒きかたびらをき元よりはだしにて父母にいとまを告し時は羽織など懸て知り給はぬ樣になし門口よりぬぎて下女にもたせ又歸る時も門口より元の樣にきて歸りを告成丈人にしられぬ樣になしにけり又幼き時分より兄弟皆母方のおば成人にあつき世話になり候へば何とぞして其おんをむくはん事を思ひけれども男子は外に樣〻の用事有妹は他家へ遣し候ゆへ兄弟皆の替りに自分一人にておんを返す樣にかくごをきわめ他家に參る事は色〻と云こしらへ堅くことわり次の弟萬喜江戸へ物學びに參りて相果候へば猶更父もまたしばらくもかたはらを去しめず誠に父もまた次第に老すいして公勤もしし其後は猶更父かん病に打かゝりければ後おば成人流行やみにかゝり給ひければ實子迚もなく此時こそと思ひおばの内かたには能樣に云こしらへ父に願ひ自分の宅へ申受惡きいたみなれば父母は一間に入ず下女の手もからずひる夜凡十日間計身一つにてかんびよふ致といへどもやまひ次第におもりければ病人も其かんびよふのせつ成事を歡びかく迄盡し平ゆせざる事こそ實に天命な

りとて安心をなしてぞおはり給ひぬ何事も行届きし印にや少も跡へじやきをふれず母のなげきを引立むがため自分なげきは少も見せずいろ／＼として慰めける有時は野邊に山路に父の心のまゝ母諸共に出行小さき茶道具一さい水迄も自參なしつゝ先々にて茶など入折にふれ打かたらい父歌を詠じ給へば學びし事はなけれども父の心なぐさみにとて田植の時共／＼に行て「五月雨にぬれにやぬれし衣手をしほりもおへす取早苗哉」又其年の名月に雲りければ「こひ／＼し今宵の月をあたにしてしはし成とも曇なかくしそ」歌の道には叶はねども只々父を慰むる心よりよみし歌なり有時風の心地あしくして物ぐるしき事有けりされども其氣色少も父母にしらせず父母の心遣ひして折／＼寢間にとひ給ひければ「たらちねの心盡しをいかにせん身のいたつきは物の數かは」實におやの事のみにて私を思はずしばらくして病氣も心よくなれり父も次第に身不自由となれりゆへにやふやく屋敷内など打廻るを樂となし給へば花などうへ或はやさひをこしらへ自分くわとり土かひなどして父を歡しめけりかくの如く有事しば／＼なりければ終に太守樣の御みゝに達し

申渡

山代藤市娘たみ儀兼々父母に事方宜父病氣別而厚心を用勞事候樣子委達尊聽候處奇特之儀被思召上候依之目錄之通り被下置旨被仰出候以上

六月廿三日

白銀二枚

其後益々たゆまずひる夜ゆだんなく藥など念の入夏冬共に帶おもとかずかん病致冬の夜は六七度も小便おきし給ふとも一聲にてすぐにおき出なさしめ其後次第に病氣おもりて小便つまりければ種々心配して手を盡しけれども少も印なく夫ゆへかみを和らかにもみ小さきあなをあけて小便の出口へあて吸出せし事も有けり其

外様／＼手をかへ品をかへ百方かん病なしけれども天命の盡ところ如何とも致方なく終に慶應二年二月十一日七十二歳にておはり給ひ家内皆なげきかなしむといへどもあるべき事ならねば手あつくほうむり七七日毎に親類又は知人などよびいろ／＼くようなどほどこし四十九日も過五十日の夜は兄弟共／＼はか塲に行茶或はくわしめしなど取はやし生る人に仕へる如く打語らいて夜もすがら香花手向明朝になりておの／＼歸宅しけり總じて五十日も終りけれどもおなじく香花など手向忌中内の心得と替らざりければ親しき人最早いみもあき候へば少氣保養などすゝめければ少打あんじてもろこしは三年もきぬるふし袴五十日立ともいかでぬぐべきと紙に書てぞ出しけり父過給ひし後は母一人を大事になして母のたのしみを此上なき歡びにて夏秋過て冬にも成り其年十二月

申　渡

山代清三姉　たみ

たみ儀孝心にて先年被賞候處不替父母に事方宜敷父病中起臥藥用等を初萬端心を盡介抱格別行屆死後追孝も懇ゞ有之候段達尊聽候處奇特之儀に被思召上候依之目録之通被下置旨被仰出候以上

御紋付御小袖一ッ

慶應二年十二月廿五日

母は申に及ず皆ゞ父の事をも云出て難有涙にぞくれにける年月は立ても父の事の忘れがたさにある夜夢を見て「はかなくも常には思ふ夢の中に逢見る事を賴む外なし」又道のかたはらの花を見て「忘れむと心移して見し花も同し思ひの種となりにき」誠に此心にぞ有ける明治八年九月長安學校教員仰付られければ生徒を愛し同役にしたしみ深くして勤ける内明治七年の春身近き親類よりのいざなひに寄て熊本より三里計の所に出湯有其地にたのしみに參られける海邊にて詠も宜敷歟

びなのめならず五六日も過る内老たる人のならいとてにはかに宿許戀しくなり人に傳て其むねゐにて申來り候得共其ゐの付たる時は丁度日暮頃にてすぐに夫より明日とも云ず萬喜は世を去り妹由は他家へ遣し其弟清三は陸軍大尉を奉職し皆〻いとまなかりしゆへ親類の男の子を賴みて暮過より打立温湯場と參りける道中は三里なれども山坂計りにて人家なく行來の人さへ絶てなかりきよふやくにして夜明前に河内にちやくし後とも云ずして毋ともなひて熊本へ歸着す右の樣成事は度〻有りけり明治十年のたゝかひにて學校もやけちりちりとなり四五ヶ月計り熊本より三里計の所の親類の内へ參り不自由に暮すと云ども皆〻として申なだめければ毋も少も苦にし給はず程過て熊本へ歸り家など出來しばらくして其年の十月頃より少不鹽梅にて有けるが十一年の春に成りて次第におもりすでにあやうく見えけれども祈りきとふの印にやぜん〱心能なりけるゆへ七月一日又〻病氣もぜんくわいと申迄にはなけれども壺川小學校敎員仰付らるしばらくして其年の十月頃よりまた〱病氣おもりてついに十一月廿二日おしむべき哉五十歳にて此世を去りぬよりて戒名を孝心院妙輝日圓大姉と稱す

加藤清正の湯屋三助論

加藤清正近習の者に語れるは、吾は今日にても裸一貫にて追放に逢ふとも三年の内には元との士となる事は覺あり、如何なれば其時直に風呂屋へ馳行きて相談いたし先つ竈の火焚となつて夜晝なしに努力けば身も暖りて寒を忘れ水を汲にも人の三荷は五荷も七荷も汲んで精力いたし日數を歷れば吝嗇の亭主といへども古袷の一つも與へるべし、倘も粉骨を竭さば又も木綿の衣類鼻紙までも與るならん段々これを集めて奈良身弱の古脇指を買めこれより目の明たる馬數寄の家に奉行いたし心をかけて能く飼へば必らず其褒美あるべし、是を以て刀を求め若黨仲間奉公に出てこれより立身は我胸中にありと言へり

家政

臺所にて得らるゝ藥

松ヶ枝

不時の疾病怪我等起り醫師は居らじ藥店は遠しと云ふ場合に當り臺所は如何に樣々なる扶助藥品を與ふるか面白くも亦有益なる事なり、

一家の主婦たるもの毎夜寢に就く前に必ず熱き湯充分にあるやなきやを注意すべし夜半に至り俄かに痙攣など起るをあるとき湯の必要著るしきものなり、

小兒もし痙攣に犯されなば筋を舒べ弛めんが爲め直ちに熱き湯の中に入れしむべし華氏九十八度より百十度までは好適の湯加減なれど簡便なる知り方は臂をその用ひんとする湯の中につき込みて心地よきか否試むべし手先の加減は往々あやまる事あるものなり必ず餘り熱過ぎざるやう注意すべし、

一、打傷、挫傷等を濕ほす時は熱湯を充分に整べし湯に浸たして傷に當つる布切れは清潔なるフランネル最ともよけれどももしなくば普通の手拭にてもよろし、

一、踵、腰その他凡て關節に甚だしき挫傷を受けしときはその部を晝夜屢々熱き湯の中に入れしむべし一度に一時間半浸し置きその都度フランネルの繃帶にて卷き置くべし、切り傷の折には數分間浸すべし、

一、偷針眼及び焮衝せる眼には堪え得らるゝ程の熱き湯を用ひよ、

一、出血を防ぐには布を熱湯に浸してその局部を蓋ふべし、

一、慢性胃弱、膽汁不調より起る病、殊に胃カタルより苦しむ人は朝起き出し特一杯の温湯を飲まば大に苦みを減ずるに至るべし、

一、胸カタル、肋膜炎、肺炎、腹痛等に苦しむ時は、厚き綿を手拭に包みて熱湯の中に入れよく振り廻わして之ぼりその熱度の冷却せざるやう注意して厚きフランネルに包みその痛む局部に押し宛つべし二三時間はその温度を保つを得るなり屡々斯くすれば恐ろしき胸部の痛みも遂に除き去るを得る事あり、最も普通なる水や湯も注意すれば吾人に幾多の利益を與ふるものなるや計り難し、

一、温湯の治療も右に記せし如き効あれどこゝに又火熱の治療あり、寒氣立ちて不快なる時又は肋、腹、背、等に神經痛起る時火熱に身躰を温めなば大に苦痛を減ずべし火熱は湯治療と異り衣服を濕ほす嫌ひもなく淸潔にして簡便なり今行はるゝ懐爐など至て便利なるものなり。

火熱は神經痛の諸病に効ありて湯治療は焮衝性のものに特効あり、

一、普通の「インフルエンザ」或は頭に寒むけを感じる時は夜寢に就く前に片足を五分間づゝ火にかざし後ち手にてよくこすり温かき布にて足を覆ひ直ちに臥床に入るべし容易にして効多き療治なり、

七味中藥として吾人の用に立つもの多し、

一、痙攣或は激しき痛症に伴ふ不消化症の療治には芥子の膏藥甚だ有効なるものなり速かに結果を望む時は純粋の芥子に熱湯をかき合せ金巾の薄き布切に包みて皮膚の上に宛つべし、痛擊不愉快になり皮膚甚だ赤くなるや否直ちに他の部に移すべし始めに少し強く調合し置かば四五度各部に移すを得べし、然れども慢性病の場合に當り速急の結果を要せざる折ならば僅かに麥粉と「グレスレン」か或は玉子の蛋白を混ぜ合せて用ひたるの場合には刺撃除り激しからざる故少しく長くはり付け置くも妨げなし、頭痛、痢病、胃病、嘔氣、眩暈等の諸病の時前述の仕方に

て芥子を用ひ唯だに苦痛を減ぜしのみならで幾多の人命救はれし例も多ければ旅行の時などは注意して一壜の芥子と金巾か白木綿の切かを携帯しなば不時の危急を防ぐとあるべし、

一、咽喉の損じたるときは一匕の鹽とコップ一杯の水と杯一つの醋とを合せそれに胡椒を少しふりかけたるものは含嗽劑となるなり、効多し、

一、胡椒を麥粉と水にてよく合せたるものは齒痛、頭痛等に惱むときその局部に張り付けて痛みを減じるの効あり、

一、小兒胃に惱むとき芥子もし過激なりと思ふときは肉桂の粉を用ゆるもよし、

一、もし吐血する事あるとも驚きて激昂すべからず血もし鈍色にして多量なるときは恐るゝに足らじこれ胃より出でしものなればなりされどもし紅色にして少量なるときは肺より出づるものなればよく注意して直ちに醫師を迎ふべし醫師を待つ間に防ぎには小匕一つの鹽を與へ冷水にしぼりたる布切れを胸に當てしめ靜かに病者を臥さしむべし、

鼻より流血する時は背を下にして平扁に臥し冷水にて額と頸とを冷すべし、

一、もし誤りて有毒なるものを呑みたる時は直ちに嘔き出すやう試むべし、一杯の温湯に一匕の芥子か或は一匕の鹽を入れて飲み咽喉の口を指にてつゝくべし、さすれば嘔き出すを得るなり、

一、阿片の毒にかゝりたる時は濃き茶を飲み左右に扶けられて十數分歩行すべし、

一、火傷或は湯傷を受けし時は軟かき布を冷水に浸してその局部に當つべし玉子の蛋白或はウニ或は味噌を厚くその部にすり付け置かば甚だしからざる場合には癒ゆるものなり、

此の他猶多ければ後日又記すべし、

主婦となり居る妹へ

同上

文明の風吹きてより日に月に様々の事業起り婦人の位置高まると共に種々なる方面に於て幾多の婦人はその穎才を顯はし候へ共既往も今もこの後も永久に變らざるべき婦人の最も優美なる王國はたしかに家庭てふ王國に候、

御身一家の主婦となられ候は即ち家庭てふ王國の女王となられ候ものにてその小王國内の安寧進歩快樂は皆御身の心一つに懸り候、

「私の夫には誠に困りますいつも家を外に遊んで計り居りまして」など自分は善なるに夫は惡しと云ふ調子にて夫の放蕩を平氣に人に告白する婦人を屢々聞き及び候へどもその度毎に身の毛のよだつ思致し候、あゝ夫の家を外に遊び散らすは何の爲めに候哉主もなる原因は實にその家庭内何れかの隅に妻の注意行き届かざる處ありてその夫の心に家庭の快樂てふ蜜よりも甘き尊き味を知らしめ得ざるの點に起り申候、

子女に於ける關係も亦同様に候或る母が「あゝ内の息子には誠に困ります大枚の金を攫んで花柳の街に投げ捨てるのですもの、まあ何の因果であんな子を生みましたろふか」と申せし婦人を聞き候へど罪は何れに多く歸す申べきや悲しくも母の肩に歸する事に候、家庭に眞の樂みあり母に誠の愛ありて日夜祈りの内に児女を養育致し候はば子女は己が母の膝下をこよなき快樂の場所と思ふやう成り申べく候、

さて如何にして家庭を樂しくなし得るか是れ婦人の學ぶべき最大の課業と存じ候、悉しく申せば長き事ながら今日は或る部分の必要なる處のみかひつまんで申上候、一家揃ふて健全なるは幸福なる家庭の一要素にて健全は實に清潔と注意より得らるゝものに候、かつ清

潔は健康を扶くるのみならず誠に愉快を增すものに候是は誰しも知る所に候へども實行なし居る家庭はなかなか少きものに候、

上着と客坐敷のみ專事に清潔に致し居る人見うけ候へども是は決して眞の清潔と申ものに之れなく候家庭の清潔は實に臺所より始るものに候されば先づ毎日三食の度毎に必ずよくその用ひし器物を洗ひその器物を拭ふ布切は必ず清潔なるものなるやを注意すべし、拭ふ布切不潔ならば器物の清潔は望み難く候、食後にはその部屋を掃除し毎週一度成るべくば日を定めて戸棚の中を悉く洗ひ清め成さるべく候戸棚の中の器物はよく整頓して何時誰に見らるゝも恥かしからぬやう日々注意肝要に候、

臺所を清潔に致し候次はそこにて調理せらるべき食事の事に候「三度々々の食物そう美味のもの計りも食はれない」とは一般の申處なるほど三百六十五日朝夕美食に飽くとははずかしき事に候へど價高からずとも珍しからずとも身躰の滋養となり味もよろしきものを得る事は注意次第出來申候、

人躰の滋養を保つには樣々なる原素を要する事に候、醫師の申候に人體の養ひに最も好適なる食事は肉類と野菜との混合食なりとの事に候、肉類や果實など廉價のものにもなけれども主婦たるもの少しく意を配りて他の無益なる費を省き物買ふ時又料理するとき細心注意して無駄の出でぬやう勉めなば僅かの金にても滋養物を求め得らるゝものに候、

一獸肉は人の筋肉を强め人躰を温め一般の力を增し候ものにて必要なる食物に候へども過度に食し候はゞ却て有害なるものと相成り候、

一獸肉中最も消化し易きは羊肉に候へども本邦にては品も少なく價も高く候故一般の用には牛肉こそ上等と存じ候牛肉は羊肉に次て消化も易く小兒に食せし

むるも害なき事に候然し小兒は胃も餘り强からじか
つ大人の如く肉類を多く食するを要せず候、
一鳥肉も至て滋養なるものに候、鳥は雄鳥の肉を撰み
て御求め成さるべく牛肉も牡牛の肉が最上に候、
魚肉の新鮮なるものは消化も易く燐素に富めるを以
て腦に益あり候、肉類は必ず新鮮なるものを御求め
成さるべく候、

一豚肉は中々美味には候へども肉類中最も不消化なる
ものに候市にて求むる時はよく吟味して最も新鮮な
るものをお撰み成され度候、此の肉は殊にも注意し
てよく煮ざれば往々疾病を釀すと有るものに候、

一野菜と果實の新らしきものは此の上もなき滋養物に
候、然し古くなり少しく腐されかけたるものは又此
の上もなき害毒に候間吟味して御求め成さるべく候

一毎日少くとも一度食後に果實を用ひ候はゞ血液を清
くし健かならしむる効能あるものに候、

成るべくば三食の時はよく嚙み碎き急がず食する風習
を家内にお養ひ成され度候、三食の間々に絕へず菓子
その他のものを口に致し居候を最も不健康の原と成り
候に付嚴しく御注意成さるべく候、

縱令一汁一菜の食にても清潔に盛り清潔にならべて出
さるれば何となく心地よく味はるにものに候へど如何
なる珍味にても切り方盛り方によりて胸惡く成るもの
に候刺身は美味なりとて多くの人好み申候へどももし
今魚肉を五分か七分の原さに截り亂雜に皿に盛りて生
まにて食せよと出されなば如何に候べき如何なる魚好
きも口を閉ぢ申べき事と存じ候、

よき體裁は食事を快からしむる一大要素に候、
膳腕を清潔にし五味の調合宜しきを得るやう御注意な
され心地よき顏にて膳に向ひ家内の人々をして家の一
汁一菜は不和なる他家の珍味に勝ると云ふ感念を保た
しむるやう成さるべく候、一家の人たのしみて食膳に

向ふやう相成り候はこれぞ誠に一家健全の源に候、

一家の幸福安寧を保つには主婦たるもの、忍耐てふ事肝要に候「毎日同じ事を操り返して居る馬鹿々々しい」と申を聞き候へど家政を宰り居る事決して馬鹿々々しき事に之れなく却て寧ろ立派なる高尚なる優美なる仕事にて天が婦人に特授せし本能を磨がき試むるの最上場所に候、こゝにて非難なくその業を成し遂ぐるの婦人あらば最も立派なる婦人の摸型と存じ候、

政治教育實業看護慈善道徳皆縮圖となりて一家内に集り居るもの家庭は誠に一の王國の雛形に御座候、

よしや不愉快なる事ありても忍びて己れ一人にて擔ふやうなさるべく自分の不快を人にまき散らす如きとは必ずお慎み成され度候、

微笑は幸福なる家族の秘傳に候、

新聞など讀み居るとき面白き書か話など見當り候節は切り抜きて貯ひ置き成さるべく候後日集めて或は一の折手本となすも興あるべく或は交ぜ貼りの用にするも面白からんと存じ候、

如何に賤しき家にても及ぶ限り清潔にして及ぶ限りたのしき空氣に充たしめるやう成さるべく候、

家族の幸福の源は無欲なる愛心にて相互を結び付け些細なる事にも誠實にする事に候然し愛のうちにも猶ほ禮を失はざるやう成され度く候、

經濟の都合にて往々家内の不和不快を見る事之れ有り、候が之れは主婦たるもの、絶へず考ふべき處に候、

何物にても只だ「欲しいから」と云ふ觀念にて求むるは甚だ悪しき事に候、果して必要なるか否とくと思考しかつその品がよきか悪しきか判定し懐中を開く前に二度思考なさるべく候一錢を貯ひたるは即ち一錢を儲けたると同じ事に候、又只だ金錢を經濟するのみならず時間の貴重なる事を思ふて金錢を扱ふ如く分秒を取り扱ひ成るべく候、

前述の諸條よく御注意なされ、快活に立ち働かれ候はば家庭は常に整頓致すべく候、客の應接、戸内の掃除、衣服、書冊等の事に就き申上度き事多けれど後日に讓り申候。

家政の觀察

恕哉

一家の主婦たるものが家政を整理するの巧拙は、直接に一家の盛否に關係するものたる事は今更ら喋々するの要なかる可し、而して其家事整理上に於ける巧拙の如何に依りては、或は間接に一家團欒の基礎を固め、或は家庭不和の因を作り、家庭教育の不完全を來し、親戚朋友の交誼を缺ぐ等、皆な主婦たる者が家政整理上の責任たらざるは無し、予は常に多くの親戚朋友等(一家を組織せる)に交際するに當りて、先づ念頭に浮ぶ所のものは其家政整理上の巧拙如何にあり、一家の主婦にして家政上に不行屆の點あるを見る時は、何となく其一家には光明なき家庭たるべきことを想像するなり、如何なる地位ある人にても和樂の家庭を有せざる一家の裏面を發見したる時は、即ち其人物の幾分か價値を損じたるの感なき能はず、予は親戚を尋ね、朋友を訪ふて、先づ其家政の整否如何を觀察せんと欲する習癖あり、必竟するにこれ家主たるものを扶助すべき、一家の主婦たるもの丶人物如何を知らんと欲するが故なり、一家裏面の帝王たる主婦の人物如何を察知し、家政の整否如何を識認するは、乃ち將來其家庭の繁榮すると否とを卜するに足るべき材料たるを以てなり、予が一家の主婦たるものに重きを措く事斯の如し、蓋し予が數年間經驗せる事實は此現象を證明して餘あり。

前陳の理由を以て、予が家政觀察の習癖は愈々佳境に入り、今や其眞状を窺ふの最良方法を

算出し、實驗彌々誤らず、一家の主婦たる者の價値、延びては家主たる者の價値、立どころにして眼前に映出し來るの感あり、主婦たる者、豈に漫然として家政の整理に無頓着なるべけんや。

一家經濟上の豐否及び整否を判斷せんと欲せば、先づ其各戶に備付けある塵溜箱に就きて之れを觀察せよ、塵捨塲に放擲しある殘汚は、忽ち平常其家計の豐否を察するに屈强の材料たるべく、尙ほ精しく觀察して其箱中に若し多くの器物陶器等の破片を發見する事ある時は、其家政は決して整頓したる家庭と云ふ可らず、其他詳細に塵溜箱を觀察して、其家の食物の嗜好をも察すべく、一家の地位よりも食事に贅澤なる事、及び儉約を守ると否とも察するに足るべき好材料を得べきなり、此方法にして果して予の信ずる如く、家政の觀察を誤らずとせば、實に各戶に備付けある塵溜箱は、將來其家庭の繁榮するを否とを卜する羅針盤なりと言ふも不可なけん、一家の主婦たる者は、精細に家政上の整理に注意し、以て人をして其「アラ」を見出されざらん事こそ望ましけれ。

竹製のびんかき

流行子

髮具も日に日に新を競ひ奇を出し昨年夏には桐製の櫛松田白牡丹本店より賣出さなり忽ち世の流行となりしが、近來又もや珍奇なる髮具こそあらはれけれ、其は竹にて製したる鬢搔にして形は福鬢形なるが、材料は厚竹を延して一枚の櫛となしたり、其生地は一種かはりて面白く素よりさほりの能きことも論を俟たず、櫛脊も一種の漆にて梅樹など出し、節に蝶貝などを嵌め込みたるも面白し、其趣味は大漉なれば餘程通がる人に向く價も廉なるにあらず七十錢內外なり



かまわぬ

圖に示すちよいと挿は、二代目谷齋の彫刻に係はるものにして材は象牙に色をつけたるもの流行の趣味も元祿



の昔に返るにや、こんなもの行はる、併し價の廉なるものなれは進物用には適せり、謹し赤羽織を以て有名なる初代谷齋生時にも大抵は此二代目の作に係はるものを初代谷齋の名にて出せしものなり

三月中の盆栽及播種、接木、植替

梅の生咲觀賞すべし、室にて咲かせし分は最早花も散たれば思ひきつて枝梢を苅り込み地盤へ植ゆべし

木爪は下旬より生咲にて觀賞すべし、實付を欲するものは花にて觀賞の時を短縮するを宜しとす

珍珠花は中旬より生咲にて專ら觀賞す、觀賞し終りたる分は、枝と根を苅り込み瓦鉢へ寒土にて植つくべし、山茶も生咲を眺むべし



桃と海棠とは室咲にて觀賞す四月よりは生咲に適す、桃の接木は此月の內にすべし

櫻は室咲の分を賞す、接木には少し遲れたり

枇杷の花も賞すべし

撫子花、高麗菊、金盞草は下旬より蒔つけ置くべし

夏菊は上旬に苗分けし別床に假植しある分を下旬より本場所へ植つくべし

本菊は中旬若しくは下旬苗分をなし別床に假植し下旬より本場所へ植え替ゆるを要す

雜錄

職業の撰擇に就いて

T. Y. 生

啓者。過日は縷々の御懇書を辱なふし、早速御返事申上ぐべく存じながら、彼是と遷延、遂に再度の御手紙を煩はし、慚愧に堪へず候。さて、此程は御令息尋常中學校御卒業の由、さぞかし御悦びの御事と祝し奉り候。それについて、將來如何なる職業を撰ばせ然るべき哉云々の御下問に候へども、未熟無識の小生、いかでか御指揮ヶ間敷事申上げらるべき、併しながら、折角の御下問、御答申上げざるも失禮に候間、小生の卑

見のみ認め申候。御令息に御示し下され候はゞ幸甚だしく候。

職業を擇ぶには、先づ其人の材能に適し候ものを取るより外はこれなかるべく思はれ候。其人の好むもの善く出來さうなものを第一に擇びて、其職業の高き卑しきなどをば決して問ふまじく候歟。世の人は、官吏や教師や、法律家など申すは貴く、大工や左官や工夫などは賤しき職業の樣に思ひもし、言ひはやし致候へども、是れは大なる誤りにして、職業の上には決して貴賤の别あることなきものに候。貴賤といひ、名譽不名譽といふは、職業に存するにあらずして、其人に存するに候。内閣總理大臣の重き職に在りとても、公にしては其任を全うする能はず、私にしては其行を令くする能はずば、是れ決して貴ぶべきことにこれなく候。大工、左官の職に在りとても、斧を揮ひ、鏝を把りて、更に怠ることなく、家を建てゝは堅牢に、壁を塗りては念を入れ、其職分を全うして、少しも非難すべからざるやうせば是れ決して賤しむべからず、寧ろ其任を盡さゞる官吏、教師、法律家より遙に貴ぶべき事に候。それ故、職業を大切に盡したる人の踏みし草鞋は、僥倖によりて授かりし金鵄勳章よりも貴く候。されば、職業を御擇びあるに就いても、決して其貴賤には御懸念あるまじく存ぜられ候樣小生は固く信じ申候。唯其能不能に從ひて、其能を發達いたし候樣の事は、緊要にこれあるべく候。其事に就いて、小生曾て認め候ものゝ中に、

夫レ智識ハ貴重ナリ、然レドモ要スルニ天賦ノ材ヲ助クルニ過ギズ。能ハ則チ手ニシテ、智識ハ則チ道具ナリ。手ノ力ヲ測リテ武器ノ輕重ヲ擇ムモノハ勝チ、武器ノ重キヲ擇ミテ手ノ力ヲ測ラザルモノハ必ズ敗ル。九寸五分ハ三尺ノ長劍ニ比シテ短キコト三ノ一ニ過ギザレドモ、能者之ヲ振ヘバ勝チ、不能者

振ヘバ甕ル、唯自家ノ手カヲ測ルベキノミ。少しく極端に候へども、先づ此の如きものかと思はれ候。

又職業に從事するに就いては、苟も僥倖を希ふ心あるべからず、自主獨立の志を堅くすること何より大切に候。是れ等の事は申すまでもなき儀に候へども、維新以後今日まで、僥倖によりて世に時めける人少からざるを見ては、青年輩僥倖を出世の第一と考へ、世の進むにつれて僥倖の途塞がるをかこつの情なきにあらざれども、凡そこれほど卑劣なることはこれなく候。これを希ふの心針の孔程ありても、今後の世界に立つことは相成り申すまじく候。又此世に人間と生れ來る上は、人間同等の天分を禀け得たるものなること言ふまでもなければ、決して人と伍して相下るべき筈なく、堯舜も人なり我も人なり、同じく獨立して此世に對峙すべきことに候。故なく他人の世話になり、厄介になり、其餘光によりて生を送るが如きことあるべき儀にこれなく候。即ちどこまでも自主獨立せんと心を据ゆれば、勇猛心起り、又得も言はれぬ愉快の情胸中に滿ちて且つ艱難を何とも思はぬやうになる者に候へば、從て又如何なる職業をも仕遂げて、天晴世に立つやうに相成るべく候。

目下尙修業中の小生、かゝること申上げ候は、嗚呼ヶ間敷候へども、御令息に對しては、一日の長に候へば思ふまゝ認めて貴覽に入れ候。匆卒の際、叙次錯亂、間々章を成さゞる節も多かるべく、御令息へ御示しの折はよろしく御取捨下され度候。 率復。

捕魚養母

（口繪のゑとき）

今はむかし白河院の御時天下殺生禁斷せられければ國内に魚鳥の類絶えにけり其頃貧しき僧の年老たる母を

もちたるありけりその母魚なければものを食せざりけるに魚得がたくなりてより老の身のよわりゆくに償いたくかなしみ尋ね求れども得がたし詮方つきて自ら川邊に至り衣をかゝげて緣にをりたち漸くにして「はえ」二三尾をとり得たり然るに官人の見つくる所となり院の御所へひかれて參りぬまづ仔細をとはる僧涙を流して申すやう天下に殺生の制重きことと既に承る所なり制なくとも法師の身にてこのふるまひあるべきにあらず但年老たる母の我一人を賴みとしたまふに家貧しくして心のまゝに養ひがたく中にも魚なければもの食はざるにこの比の制きびしくして魚を得ることかたし思ひあまりて自ら川に行きて捕へたり罪に行はれんこと少しも厭はず但この魚今はなつとも再び生くべきにあらざれば母のもとへ遣して今一度あざやかなる味をすゝめて後心安く罪に行はれんといふに聞く人皆流涕す院聞しめし孝養の志淺からぬを感ぜさせ給ひてさま〲の物を遣してゆるされともしき事あらば申し出づべきよしを仰せられけり。

梅に鶯

春は來りぬ〲其愛らしき花とかんばしき香を以て春を飾るよりは梅なる春の使者として來る其朗らかなる聲を以て春を告ぐるものは鶯なる歌に

　春も今は樂しき頃となりにけり
　　梅の園生に鶯の聲

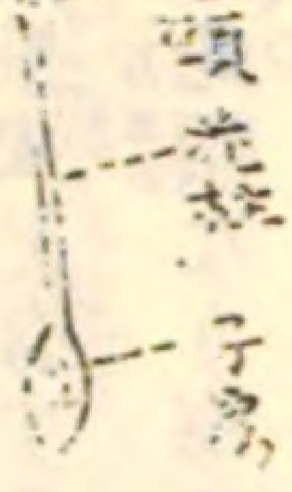
と此樂しき春此長閑なる日和に於ていかで室内に蟄居して灯燵火鉢の厄介となり居るべきいでや戸外に出でて新鮮の空氣を吸ひ花を賞し鶯を聞て樂むと共に梅の叙ぶる所鶯の語る所を左に書き連ねん。

梅の花

試みに一輪の梅花を取て此を見よ其最も大にして花の大部を占むるものは五個の花瓣なり花瓣は其色或は白

く或は紅し梅花に紅白あるは一に花瓣の色によるなり花瓣の下にかくれ海老茶色の五個の小片は之を蕚と云い蕾の時花瓣を包み居たるものなり　花瓣と蕚は花の外部をなし其中部にある更に大切なる花蕋を被ふを以て此を又花被と云ふ。

花蕋は雄蕋雌蕋の二部よりなる雌蕋は花の中央に位して只一個あり其形は圖に示す如く其上部ピンの頭の如き部を柱頭と云ひ其細長き中部を花柱と云ひ膨れたる下部を子房と云ふ。



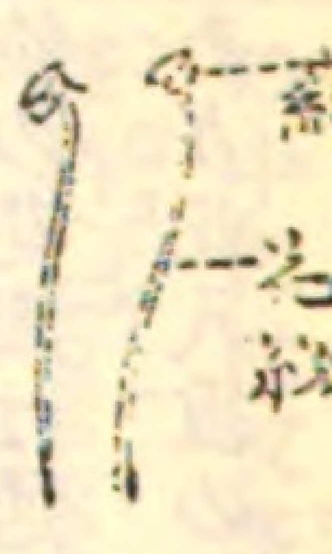
梅の雌蕋

子房は一個の小嚢にして中に一個の小躰を藏す此を胚珠と云ふ。



子房の縦断圖

雄蕋は雌蕋の周圍にありて其數數十其形ピンに似たりピンの頭に相當する上部は黄色にして此を葯と云い針身に當れる部は白くして此を花絲と云ふ、



雄蕋の圖

葯はくはしく見れば二個の嚢よりなり其中に黄色の粉を藏す此粉を花粉と云ひ顯微鏡にて此を見れば圖に示す如き小粒の集りしものなれば此を花粉粒と云ふ。


花粉を顯微鏡にて擴大せる圖

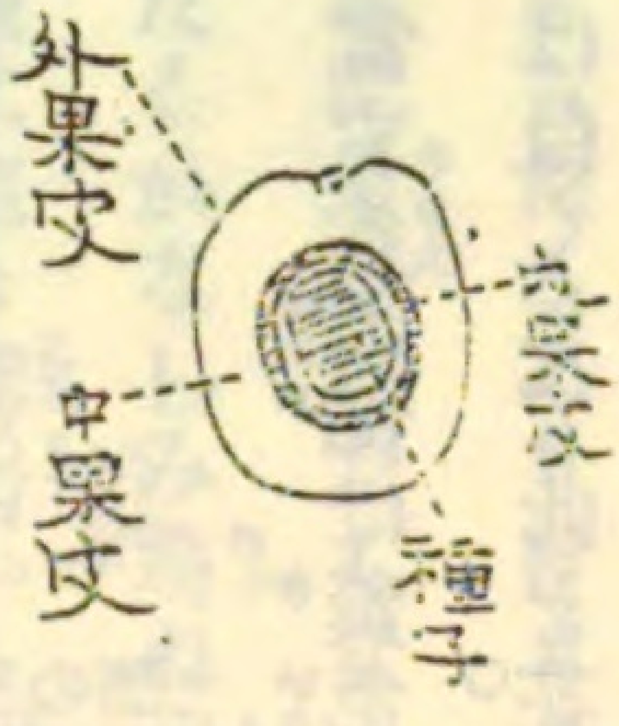
花粉熟すれば嚢を破て飛散し終に雌蕋の柱頭に止る柱頭には粘液あり此れ花粉の附き易き爲なり柱頭に止りたる花粉粒は其内部より長き花粉管と呼ぶ管を出し花柱の實質を通過して子房に達し終に其中の胚珠と接合す此の作用を受精と云ふ。



受精の後子房と胚珠は漸ゝ生長して果實となり柱頭及び花柱は萎縮して消失す。

梅の果實

果實は子房の成熟したるものにて果皮と種子の二部よりなり果皮は更に三層よりなる(一)外果皮外部の薄き



梅の果實斷面圖

皮即ち是なり(二)中果皮果實の漿質の部即ち主として食用に供する部なり(三)内果皮其質堅牢にして中部の核をなす。

核を裂れば中に一個の白き種子を藏す此れ即ち胚珠の成熟したるものなり故に通例種子なりと考ふるものは内果皮をも含有するものと知る可し此の如く堅牢なる内果皮を有する果實を丸し核果と云ひ桃の果實の如きも此類なり梅の果實は其熟せざる前は少量の青酸と云ふ毒物を含むが故に此を食ふは宜しからず。

梅の香

梅の愛すべき所は其香にあり古人も

梅か香の匂はさりせはぬま玉の
闇の春をは誰かしらまし

散りぬとも香をたにのこせ梅の花
戀き時の思出にせん

梅か香を袖にうつして止めては
春は過くともあだけならまし

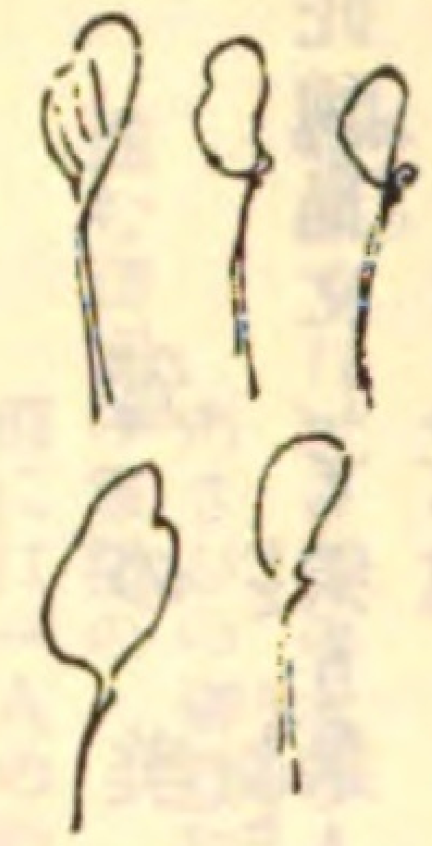
春の夜の闇にあやなし梅の花
色は見へねど香やはかくる

と讀みて其情を顯はせり名高き大和國の月が瀨の梅も一里の手前より匂ふとかや或人の歌に月ヶ瀨の梅の林や近からし山下風ぞ香に匂ひける」と夫れは兎も角梅の香は一種の揮發油にして其極めて少量なるが爲叉極めて氣散し易き哉熟練なる化學者も此を分析して其成分分量を知るに苦み銳敏なる試驗藥も此を鑑定する能はざる也然るに吾人の鼻は闇夜も尙此匂ひ一里の距離に於て此を鑑定するとせば實に此鼻こそは銳敏なる試驗藥熟錬せる分析家なりと云ふ可し。

八重の梅花

梅の花瓣は通例單重なれど時として八重なるを見る事あり此八重の花瓣は元雄蕋の變形せしものなれば八重

の花は雄蕊の數少くして且つ萎縮し居るを見る可し此れ雄蕊の勢力花瓣に遷りたればなり故に注意し見れば其中に雄蕊の花瓣に變ぜんとしつゝあるものを發見すべし此變形は通例單重の花にも往々發見するものなり、此の如く八重の梅は雄蕊の勢力を花瓣に奪はるゝが故に其果實甚だ小なり。



雄蕊の花瓣に變ぜんとするもの

「七重八重花は咲けども山吹の實の一つだになきぞ悲しき」と歌に泳まれたる山吹の實を結ばざるも雄蕊の勢力花瓣に遷りたるによる單重の山吹の能く果を結ぶを以ても知るべし。

梅の分類

昔は植物を分類するに木、草、喬木灌木蘚苔等に區別せり現時は其花の有無により大別して顯花植物、隱花植物の二種となす梅は勿論顯花植物なるが顯花植物の中には又多くの部類に分たれ其梅の屬する部類は薔薇科(Rosaceae)と云ひ薔薇、櫻、桃、梨、山吹、枇杷、等皆此科に屬す薔薇科中更に小區分あり梅は桃、櫻、あんず、すもゝ等と共に櫻屬(Plunus)に屬し學名を(Plunus Mume)と云ふ。

鶯の分類

動物は其脊骨の有無により此を無脊動物、有脊動物の二大部に分つ無脊動物とは貝、烏賊、海膽、蚯蚓、海老昆蟲類等の類にして有脊動物中とは魚類蛙類蛇類鳥類獸類等なり鶯は鳥類中の燕雀類に屬し、からす、むくどり、やまがら、もず、つくみ、ひよどり、せきれい、すゞめ、ひばり、つばめと同類なり而して燕雀類中のうぐひす科(Syloïdae)に屬し學名を(Cettria Cantius)と云ふ。

鶯の外貌

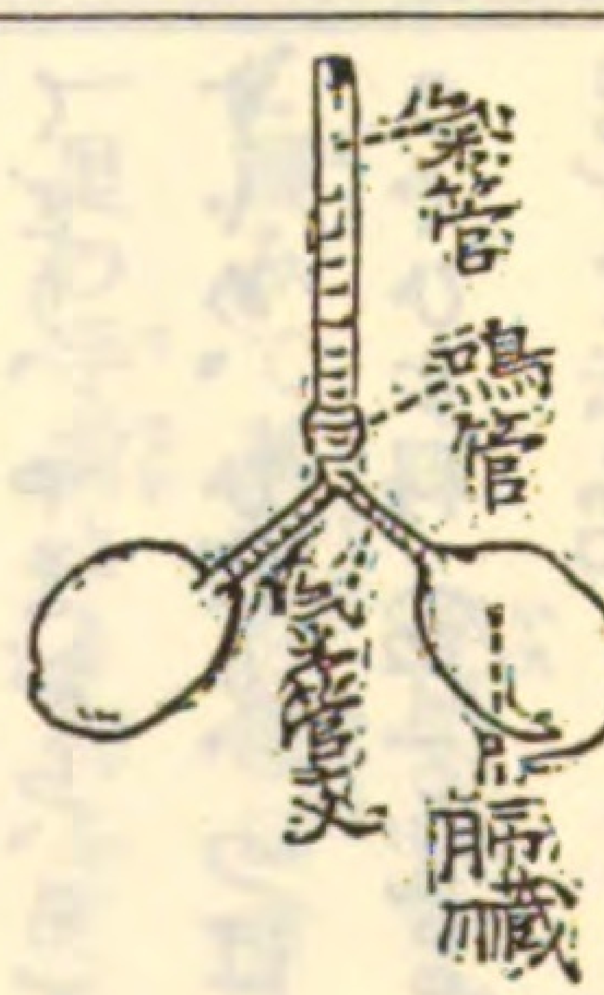
其大さは雀の如く羽毛灰色にして頗る醜し其嘴は小蟲

を捕獲するに適し其足は小枝に止るに適す彼の鶴を見よ其嘴頸共に長く脚又長し此れ其水中を渉歩して魚蟲を哺食するに適せんが爲めにして又彼の鷲、鷹の嘴は曲て鋭く指に鋭爪を有するは其好て鮮肉を貪り食するに適せん鶯の躰形嘴趾の構造自ら其境遇に適し皆造物者の意匠と其無限を顯はさゞるなし。



鶯の美音

此醜鳥にして獨り衆人を愛顧を肆にし金殿玉楼に飼育せらるゝの榮を得るもの一に其音の朗麗なるにあり此美音は何所より生じ何所より出づるや試みに此を解剖して其氣管を見れば氣管の下部將に氣管支に分れんとする所に於て少しく膨大せし部分あり此其美音を生ずる處にして此を鳴管と云ふ鳴管の中には人類の喉頭の如く薄き膜の如き装置ありて肺臓より出て來る空氣の爲めに震動して音を發するなり。



凡て鳥類の美音を發するものは其雄にして鶯も又然り雄鳥は美毛を有せざるものは美音を發す此れ雌鳥の注意を引き其愛を買はん爲なり野生の鶯は飼養せしものに比すれば左程其音朗麗ならず故に此を捕ふるや先づ長く飼養して美音を有するものと共に置けば自然と其美音を學び全く其野音を脱するに至れば一羽五十錢の藪鶯は忽ちにして數圓の聲價に上るべし云ふを止めよ人物は天性なりと教育の欠くべからざる鶯に於て何然り況んや人に於てをや。

歌苑

日章旗

田舎婦人

稜威もたかき日の本の
　あさひの御旗押たてゝ
進む御國の軍隊の
　前には一人の敵もなし
　　押たてゝゆけ　日章旗
　　輝くあさひに　靡かせて

東の空のあけぼのに
　かゞやく旭日章旗
進むにつけて行先は
　暗地を去りてくまもなく
明なき國をなさんため
　開けゆく代をなさんため
　　押たてゝゆけ　日章旗
　　輝く朝日に　靡かせて

御旗になびく神風は
　今はた暗きさつ國の
都をかすむる仇ざくら
　吹ちらしてぞ影もなし
されど櫻のはなびらは
　西に東にはた北に
いつ咲き返すやも志れず
　幹の根たゝんそれ迄は
　　押たてゝゆけ　日章旗
　　輝くあさひに　靡かせて

金水橋曲

在臺灣　王岬散人

母親不必怒生嗔、孩兒言來惡娘親、兒在金水把魚釣、只見善魚上釣鈎、千歲鳴鑼開道到、嚇走善魚落水流逃、叫他剖魚他不肯、兒嗔怒氣難消、兒就打、打甚麼、打死千歲、怕甚麼王法。

（こは臺灣に於ける支那人演劇中の一曲）

金水橋の曲をきゝて感あり誠に其意をとりて作れる

光るがごときまなざしは
　うごかしがたくぞみえにける
紅葉の手をばつかへたり
　こぼるゝ如き愛嬌に
まなこにあらぬをさな子は
　今しも母のそのまへに
咲けるは百合か白薔薇か
　世の罪さがもうへ志たも

＊　＊　＊　＊

ノウ母さまよいかられな
　坊やがいふこときゝたまへ
今しも坊やが釣にさて
　こがれ橋にぞゐたりける
魚や來よ來よ魚や來よ
　まてばまちにしかひありて
スハこそきたれよき魚ぞ
　釣りてはものを母さまの
褒美の料をなさんずさ
　よろこびたるも束の間や
おもへはくやしなさけなし
　下に下にと制しつゝ
大道せましされりきたる
　サンヒン野郎が鑼の音に
むれんや魚はにげにけり
　かへせサンヒン其うをを
いへどさけべど知らぬ火の
　心つくしなきかばこそ
あさは見もせですぎにけり
　おもへばくやしなさけなし
ノウ母さまよいかられな
　坊やはゆきて打ちてこん
うちまもりつゝきゝゐたる
　母はたちまち問へり兒よ
打つさは誰をサンヒンを
　よしやサンヒン死ればさて
坊やはおそれじ王法は
　いかに志げくもおもくさも

＊　＊　＊　＊

こさわりなりやをさな子よ
つよきが勝ちしらざるか
爾はこれより世にいでゝ
はしきこの子よわが見らよ
今の世の中よのさまは
長きが得さおもはぬか
又この風にあたるらん
心たしかにおもへ子等

瓜生玄子譯

棄婦

誰がために
さるもゝのうき
かゝみにうつる
昔のまゝに
眉はあれども
かげさ見ねしか
まだ白たへの
ありさはいへさ
きねてあさなき
君がため
手織らんものさ
糸はながくも
ちぎりおもへは
涙にそまる
色のまに／＼
人のこゝろを
なげきしこさも
むかしがたりに
すがの根の
長かれかしさ
契をこめし
君ゐまされは
今は吾身に
さくさもさらに
玉くしげ
吾すがた
三日月の
十六夜の肌
吾雪の色
其人は
生別れ
つぎ／＼の
長からぬ
くれなゐの
ねりいさの
うつろふる
から人の
今は身に
あらぬなり
紳かけて
常陸帯
ありさても
なにかせん
君がため
をしくはあらじ
ひもさしなるも
ふるこさしらは
わすらるゝ
身は空蟬の
死するはいさゝ
さはさりながら
君のかたみの
いかでしのびん
命ながらへ
すがたや君に
空たのみなる
ぬぐ靴の
君が身に
うれしけれ
なきがらを
やすきわさ
契りてし
身にあるを
をしからぬ
撫子の
にまさんさ
昨日今日

白金

黄金もしかぬ
見るはうれしく
生れながらに
片親しらぬ
父はさ問はゝ
ゆき末なかき
世のうきことは
父なき子よさ
子寶を
かなしけれ
いそがひの
幼子の
なにさせん
おひたちを
たゞ一つ
さみされん
三くだりの
短き文の
ありて甲斐なき
ちゞにみだるゝ
君が手ふれし
あさゝおもへは
さくにはをしゝ
つけてぞ君の
しのびなくさむ
ゑにしさは
黒髪の
吾こゝろ
水くきの
なが／＼に
吾はたに
かたみさも
たれさせん

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 金子佐治郎
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行